湖月抄

あつま屋

東屋

孟 四阿(アヅマヤ)四方へおろされたるやうに造りたる屋なり 細 巻ノ名以(テ)哥并(ニ)詞(ヲ)号(ス)之(ヲ) 孟曰 師哥 さしとむるむぐらやしげきあづまやのあまりほどふるあまそゝきかな 詞にハ あながちにかりそめなれども東屋のかたをかしげにて只奇とりて巻の名とはいふべし 細 薫此家の八月より九月までのことあり 孟曰

つくば山を 細 常陸の国にて 名所なれどこゝにてハ 孟説 端山とハ山のしげき所 けれ どもひたちのかみの八の宮のあたりをいふ也 かりのあるかたこゝをみれば浮舟のあたりをいはんとて也 浮舟の事なり 云々 八の宮の御むすめなれど 常陸の守のまゝ子なれば ひたちのかミ 奇の思われければ をかしく思ひとりたる 女をいはんとて也 常陸の守の女 をかしけれども いやしき宮つかへ人の子なり 薫の御心ばへ まだなみならぬ 此上の思ひつまる 細 薫の上 のおもかげいかでかみえん 浮舟の事也 まゐらせんとおもへども 八の宮の御むすめなれば ハ常陸守のまゝ子にて その人のほど いやしくおもはれ給ふべき のこゝろをしのびて つくしきこえん 思惟

つくば山をわけみまほしき御心はありながら はやまのしげりまであながちに思ひいらんもいと人ぎゝかろがろしう かたはらいたかるべきほどなれば おぼしはゞかりて御せうそこをだにえつたへさせ給はず かの尼君のもとよりぞ 母北の方に(浮舟の母也)(弁尼也)のたまひしさまなど(薫の心をさしはかりて)たびたびほのめかしけれど まめやかに(細 母の心也)御心とまるべきこととも思はねば たゞさまでもたづねしり給ふらんこそと思ふもをかしうて 人の御ほどのたゞ今世にありがたげなるをも(物の数ならましかば浮舟を薫にまいらせんものを也) かずならましかばなどぞよろづに思ひける

こくさまてと露ちりかゝらてくりつり 師 いさゝかよ露のかゝりてもいかゞと
くゝのことゞもを 細 常陸守も親王之さ(れ)ば中将の君 弄 別勢以下をはらふ
さとうによりてなをとりなすとかいふべし 孟 同義

姫君とつけてし 抄 此姫君之
いふ人は常陸守か少将の妻
なるべし
まだおさなきなど五六人あり
孟 浮舟ハ常陸前司が
子どもは花人の式ア丞
と源少納言の妻と謀
彼常陸が妻とも上の服
也。花人将監と童之
少将の妻と八今少将の
腹ぐ 花義
いかでひきすぐれておもだたしきほどに
しなして 抄 浮舟をいふに
此母の心
とあてこのよのめより
孟 ことさら母のへこめの所
此母の心とてもとし

こどもハ母なくなりにけるなどあまたこ
のはらにも姫君とつけてかしづくあり。まだ（母の母之）
おさなきなど。すぎ〲に五六人ありけ（細 常陸腹之）
れバさま〲にこのあつかひをしつゝこと人（他人のごとくおもひへだてたる心）
とおもひへだてたる心のありけれバ。つねにい（細 浮舟をさして）
とつらきものにかみをもうらみつゝ。いか（抄 常陸が浮舟の母の根ざしなく）
でひきすぐれて。おもだゝしきほどにしなし
てもみえにしがなとあけくれこの
母君ハおもひあつかひける。さまかたち（常陸がまとはせてもいやしき）
のなのめにとりまぜてもあ

まおもひあつかふ 細 この字清濁
両義あり。濁義可然乃
字也 孟 浮舟の母の心をいふ
あらしてもなべて常陸が
子として見てもよかるべき
ども。まぎれて出たる人ハ
常陸がむすめとおもひて
いとあつかふべし 師 孟
の説ハ同子とおもはせて
もとよりむすめ。義ハ母
説としまし。両説よし
ハ同事とぞ

なまきんだちめく
一門の中にたかいやしき
人 常陸抄

りぬべくハ何かハくるしきまでもてな
やまじ。おなじごとおもはせてもありぬ（清濁両義あり）
べき世を。物にもまじらず哀にかたじけ（孟 浮舟のことなれば）
なくおひ出給へバあたらしく心ぐるしき物
におもへり。むすめおほかりときゝて生君（孟 常陸がむすめどもおほくあればとて）
達めく人〲もおとなひいふ。いとあまたあり
けり。はじめのはらの二三人ハみなさま〲にく（抄 前腹のむすめ）
ばりて。おとなびさせたり。今ハわが（細 くばりつけし也）
姫君をおもふやうにてみたてまつらばやとあけ（浮舟の）
暮まもりて。なでかしづくことかぎりなし。かみも（孟 浮舟を指傳之）
いやしき人にハあらざりけり。上達部（常陸）
のすぢにてなからひも物きたなき人

事なかりしひも八母なき
のよし
ことごのみこのみたる事より
八あやしう
好事とハ物数寄などす　愚案
る事也。物数寄なるどもを
それにもにずハ風流なる
ところをさいはひで又
あらくたけく田舎めき
たる心なりしとぞ

孟 捨ものきたなき人にハあらず
れきたる人のまハさてぞ
こそ物きらひあれ

あらずぞ。とくいかめしうなどあれば。ほど〱（孟 徳之 三 富ある人をいふ）
につけてはおもひあがりて。家のうちもきら
〱しく。ものきよげにすみなし。ことこ
のみしたるほどよりは。あやしうあら〱
しうゐなかびたる心ぞつきたりける。わか
うより。さるあづまかたの。はるかなる世界
にうづもれてとしへければにや。こゑなど（細 常陸ハ奥州のちかき所也）
ほと〱うちゆがみぬべく。ものうちいふ
すこしたみたるやうにて。がうけのあたり（細 豪家）
おそろしくわづらはしきものに。はゞかりおぢ
すべていとまたくすきまなき心もあり。（細 全き心 孟 正直なる心）
をかしきさまにことふえのみちはとほう。ゆみをなん（孟 常陸の守はゆみをとる人）

なまめかしきわかうども
いふをば　受領の家のひく
き所ともいふべく　常陸
がいきほひによりそれて
わかき人くるまどひ
ことくりしとぞ
かうしんをし　細 守庚
申するは花 庚申経見人
腹中有三尸為人大害
常庚申之夜上告天
帝 不令人生
庚申夜不寝則
年長 ... 推甲子夜
真 ... 共守庚申

左近少将　孟 大将なりし
人の子也 大将も先祖も
なき宰相よりなる人
となり

かよひし所なども
此所がねのむすめ通ひ

いとよくひきける。なほ〱しきあたりとも
いはず。いきほひにひかされて。よきわかうど
もさうぞくありさまはえならずとゝのへつゝ。こし（細 歌合物語合也）
をれたる歌あはせ。ものがたり。かうしんをし。ま
ばゆくみぐるしく。あそびがちにこのめるを。この
けさうのきんだちらう〱じくかたちなんいみ（孟 むすめを云なるべし）
じかなるなどをかしきかたにいひなして。心（細 浮舟の事也）
をつくしあへる中に。さこんの少将とて。年廿二
三ばかりのほどにて。こゝろばせしめやかに。ざえ
ありといふかたは。人にゆるされたれど。きら〱
しういまめいてなどはえあらぬにや。かよひ

しかし聞て此常陸の方
のやうにひやうくうへ
みな／＼思ひかけ給ふなり
いふなるは　孟　方くより
浮舟のことをいふなるは右
近おね（の）君　母のことなり
也けり

さいへんと　細　家中より
まいりてそなたけ也給へ
えいふせうきゝもなけれ
いふ　師　家配安鏡之
とえもしもかへて
かくこそとのは常陸
ともも　抄　常陸は浮舟
と妹　思ふ　ありけるも母
え　あみもらんとし

しそくわかどもして、いと、あんだりつよ
いひかゝりつゝ、此君いうしうおかみさうりとい
ふ人ぞの中に、此君いふ人がしくともやさしら
るこゝさこまりて、物とひらうぬべからぬ給
人とあそびかりや。これしりまつりてこと
くきゝてハの人々さらうおいくりとさはいん
どもぞひやうしとおひて、此れりこまとり
つぎてさうへきおりくも、おかしさ海ま近
まいるどもをきせ、そしてまつうひ、ひとかりま
おひまうけてうきこくそとろうまおひかきた
我ハ今とをゆづりてうつきてん。と海うちら
のめでしさそとうつさるハ、ざりともとろうま

八月ばかりとさだめて
浮舟の後見をかねよ
やうくにせしけり
てうじとかうけするゝ
ここのあそび物を
浮舟の後見の用意に詞
あそびこちへりてあそ
び物あどせさせん
そのりのをとられむさと
とそこみもれて
まさこ在をハ浮舟の調度
みえしもうるね物しよう
とふ心よ物ざりとし母君
薩この心をそて求こゝろえ
るいてうはう　細　今の
かゝのあそこいへあるり
花同をも防ハ云このいの
うきつくにはれ。楽
人業雅このあのあつて
河海抄に云天慶三年十月
九日召内教坊妓女十人
今定楽の条行はこれ若菜の

なりはいうとふ人かくしとおひまちて、八月
ばかりと契りてうじ給ふりけるゝすることあ
そび物とをきせても、さ海っしくるよ、やうかり
うずまき念らそんの海やうくうりなれん、まき
まくらかへ物と、ハこのけうこみとゐりかし
てそうりの我これらんうさとてこそれば
えらくあさとあてべそこいうしてきていり
ぞの人ゐてうじくいふかさりやでこそうあ
つめてあるしべもへつ。めでとさつ。あさし給う
ぞうりふく、琴ひきのしとて、あひけりうえ
のまうりうハ、むすへとりつてあらはず。てひ
とんひくされバ、師とさらぬかがてそよろ

女樂の本よみ

ゑしかりしき文業などは
細 師とは孟 樂の師也
小學ニむかしめしし樂を
わうとしかぐれきじにわ
ふどごさくて孟嘗が
滅ぞそうして後に太平
無事じやうの樂ハ抱
とそぬるう 面白が
三 師匠 同絡の由く
うこくし 細 否とどそ
済母とりハとろそゝよ
三絡ふとうしむろるり
孟嘗が我子とぞそれ
ぞはるおぬと母をう
らむるく
わうらろひう河よりうひ
いそくも 済母の子とも常
陸をことへそてとらお
いふれく母のこひう河をそ
ふひのそくるも ぞ おる

こひろくをとくくまろくしとしうづむどろうり
てりそさそぐそやつまうくるるこくのまれを
どをしへて、ふとをかしき文業などよひさ
わくをそてあそぶ時はすこしもつてまむぞお
こが母しきこゆうぐこまじすりよりのめぐく思ふわ。
うろくしぐり父母君はもとうりのゆへ思り
てびとしをぐるしとおりんべきよあへしくさき
ぬをおもと父ぞおりひおくしまへうとつてはるゝ
うしをそろうてうのかね聟うし寝ぞゆよ
ちつけてわすぐくいとくとをあかれぞわうか
ろうひう河ようかあひのそくもびとつくるよ
しうへの心乃ちりくさぶ父ゆてそふめゝよ

くめゆゑうつんとかねのん
に知うくさいまち思ひし
ことく
ころ河波わし文ひくくる
この 済母を孝謙
ぞひ海れバ我心一河ち身
うしきこん嫁よふ
河し

孫の父と抱しまちぬ人
お済母は父のおりなる
とす

音の人ふーうる
細 あうつきこう人父父の
子をとりふ死 おく父常陸
の子をに我ハそひゆづり
てそろそうるうとを

ほつさへきわれる人のこゝろよたくらうまひ
まをて、うろしふうろ河波わりてをひろぐうち
しのわうと。河ばうろのまそ嗣どのへぬる
と、さうくのくの人ふみと抱し給ひてはうつけ
あうんぐうしうそてうらとひらちよまう父。
たやみぞ抱し給ふぬ人なれバ心ひう河おち
やうみくうさつしろてうう打あくぬさ海はこ
ちゆうねるまりやとく
えなまうさとりやとるてうんそよりつさん
ぐわゆるさ従ッれど、父ふ人ぐうしるへをみひづうゝ
とあひゆづれくこの志乃河井をのこゝちん
そうれさ世中どとうろみもうちろめくていき
じさ父抱妙りそうりめべきれんぶ海とゝくて

かりしなりぬひつかれなんとん
とむくしかて　常陸守をさす
しるくバいやしきりんのてこ
みるくよの将の兄なりて
しくし　三　常陸守が女と
ありてお返しそいとし

みなれずなどすれど人〃ても
母のむすめにて常陸乃
守が子なれど人それには
あらうれども実子は常陸の
ひとめあらねど人をて
とゝりうらくく
女九のちるしうり　媒乃
妹のみのちとをある説を
てお将の文伝ひとやせ
しとぞ　奥よこの
中将うつむすめしりの
かむさんの中よりの

てうぐまゝ例のつましき我わすられぬべう
めやすかりしをさぐすなかりけんぞんもこゝしぶい
しるく人にまれしうあるべきさまなるをかねの
さるよすがでこそかくなんとおもひよりし訳
あしくさりぬべしはじめよりさらに守の御
娘にあらずといふことなんきかざりつる
おなじことなれど人ぎゝもおとりたる心
ちして出いりせんにもよからずなんある
べきようあないもきかでうかびたることをつたへける
との給ふにいとほしくなりてくは
しくもしり給へず女どものしるたよりにて仰
せごとをつたへはじめ侍りしに中にかしづく

さるしづいのくみゆえて常
陸のむすめめしがりし
りとぞ陳をるたり
こと人の子といまあまん
三　継子などのあるとハ
あらふずりしきく
くちらんとをくれて物
し給　おそより媒の
常陸のむすめ給と
浮舟の事也

恙なしあてやかならぬさま
こゝし　細　少将　少将
のけうかうかうふ無異した
この事を少将がゆの利
験はうつもそとうしふ
ことあてやかならぬと云
さやうのあたり　細
のあくよそまらうれるう　文気
おもうろしきとぞ　孟

むすめとのみきゝ侍れバいとゞの守のにこそは
とこそ思ひ給へつれこと人のこもたまへらんとも
とひきゝ侍らざりつるなりかたち心もす
ぐれてものし給ふことはゝうへのかなしうし
給ひておもだゝしうけだかきことをせんと
あがめかしづかるときゝ侍りしかバいかでかのへん
のことをつたへしらん人もがなとの給はせ
しかバさるたよりありてとり申しし
なりさらにうかびたるつみ侍るまじきことゝ
はらあしくことばおほかるものにて申すに
君いとあてやかならぬさまにて
さやうのあたりにいきかよはん人のをさく

かよひ人とゆひて人の心をさく
ところあらし 師 仁王 さ
かよひ人かの人のとあり
とふかあかしうかてあるめ
て 定家卿てもよく舞
をとりてあしわがあうしろ
む 古のをさらく ゆうこね
つこもりうつてゆきさ
よふくみひいやの世まあ
•うとしく
ゆきすどかしうらかくとあは
なりいとも 箋 同おくえ
源氏を定家よりつそ
こふさもかりかりとく

ゆかしねくしもあれど いまやうのものとしうてしと（當世やうそとく）
かあまじうりて あがめてうちこのうらびけ
よろこくもてなすんあつかひもあめりと
はれどもくらしくみにくゝもふも おそのお（細 哀人といへ略）
ざしきなんあつかひく人いひなさきべき源氏の御
云さあけさのうへなるどのうけがうくうかし（のむことかへし 桑園まての）
こゝめく出いふんよりとふかきゆきしくうち
られめさ海ふかくまじらむんなすんいと人げ（細 媒なり）
なりへさとの絡みの人へつひなかうあかうさ（かの将のなれびひさるをかくぞわく）（うさく）
てあゝ人のらふかくこれをいとにおもしうご
ちこうなすこよりてあしう思ふれば海くしき（細 媒の詞）
うこのひをとめともあはさは ゆ（細 弁ちくらうあらじ）

ある[illegible]
故殿三人ありける中
ろむすめとひめ姫といひ
ひて常陸の守でまのうろ
とく
そしあらり志ろいひとれ
あるめどこまて
絡め源丹とひて又中
むもあるとのそんる
めるまとく
うんのぬしの 細 ものぬ
しなりうやまひう
河云 孟常陸がうすこ
か将なよは常陸を娘
えうせんとなりし

ゆゑひとを志つゝみ給へ人しおかよあさ（細 實子ととゆへしくとし）
あられんひめきしてうとへいとなかうし志
絡わかうと中す母 いさや らびめかうしいひ（細 廿ねの詞）
これかうしとてきて又いともむしそうして
あれされどけび明いかのむものぬしのひと
かうとゆりの志く地しなす さ人なればこう
志かく人をせ出す ゆうころとそわあまて志
ひとびめしまあり もつかりかうらの（孟 專人行）
もくれこんなんなすれねりんひすの志れ（品）
貴 艶
あてまえんなうしん女とねがはしやもくえひ（孟 不弁なりくま）（孟 艶なり）
べしされどさびしうしくうからぬこや（よのなかなりわし 師 風流子 精こしとさまえ）
びこのめう人のなぞそくいりのぶてあくすれ

あくらうかて世の中をと
おかゝ浮世の業を替りめく
人の帰りのさ留し
ふしもとゆうをえしきこあく
いえのふくえさもとのあふ
孟常陸の国にあつくも
大おいそれまてすうんとえ
帰何くえさもとハ何よつ
いさやうまいうるしハいうん
とく
このかしのれうさま
細すわうの方にあつえ吉
の方へくえ仍てよふ事も
なさえとくえ花みしのれ
うさハ渡舟のことのまで
え媒ぬまる人ふんのいうう
と西のれうまあるを
いふく
あまおうくしき
おかゝのうらくしかろうあし

く人にも人ともめぐしさらぬとられバそこ
し人まそしらまとと。おぶくるみて世中
ともぐさんへと給わずふたりうえまうくるん
とうてしひてさとともゆうをえしきあらバ
あまりいさりとの縁このひとハにゆうしゆのこ
細媒まうり
おゞ
常陸
此みしのれ方よおわうふうらよううれ丈るまで
をとりつえべふじめなれど。うえぬけくうう
三 常陸も只媒をとぐぬこ
らをえてあつうれぬ物なりもうでいきこうり
えのぬさうけうまへよいうそてらう申べき
孟常陸が母へ媒がゆくえ
ことまてなんともいうすうを此ともうらり
常陸がい
咲ど出うりハすとらけど。まへまハうびいぬ
人のなまでしいひょうわんとも海あく

ううくひゞくけまうあいて
孟常陸がかりのみがれ
ふそうらうれぬ媒が縁り
出しさきがうろていまそ
ふく
うらの所うてまよせうてそこ
咲ひえさせ　ふのうえ治
むをめのみをそひく
かおあ。うう世うちそそれ
へうしまふとうとしう内
れうさハ内房のこと
花ぶらのおういうちんまで世
のうちへつういまうんや
うろうん　孟常陸の子
みくらうまさあへれ出あり
くいみのひとにうらとこ
うすくびうひてハいつうふ
やうらんしいおもどの
白作と嫁が扨く

あくしさ元気なるうれど。右近か将藏の机まそう
細媒の扨し
孟常陸
そとうてなんさふつ娘といさをしれバおひ
媒とあひまり
まらぶさらひゞさげなうう佃してちうう ゐ
細媒の扨し
まりて。月ごろうちのれうさまぜうそこ西の
孟浮舟の子と小方と申定め
さ世よ紙はゆるしあそて。此月の縁よとち
ろうてし
ごり宇すさ世縁のうけとを目をとろうひ。
いつしうとめ月をも縁よおうく人の中もうや
孟常陸
う海くまよ小方のれつくまりのしまへどらむ
のむをめそてハあなえとし
の夜乃れむをめふは　おうくをぞすゞむ ずらの
おりうよちんよ世の中のしあまんへつうひとう
まうり
やうすらしんど。執のれひとよあり縁がやうり乃
常と京業の母をとりめ
まんずらハそでままうしの玄れ。とくどうし

ほまさらば
手に業上業とりふ[illegible]

[illegible]

つきそひて、身によそげしかりごと[illegible]
[illegible]

三 媒のこと

細守とわけてよそ

常陸の子によそぬ人の[illegible]

[illegible]

細ちの[illegible]

常陸は[illegible]

清母の[illegible]

[illegible]

ろゝハほとられしく
孟叙どさこりゆく宮
ハられぬと常陸の絶之
菊ぞ今ハまるえん
三 姫君とつけたる函殿
の中将
ののふくとわれどいまの世
けん人の心ならざるすく
孟此ひとめハ前の御方に
秘蔵されバ翁今まで
つけてうらみもいで
来そいとハやらこゝそぐへ
と仍奉せでとくとも
大納言殿よ 細 一条関白不分
明也此世ねしあはかり
し人のまどつてしより
孟頭とよもむとかとか
将の母北の方

いまら給ひらずらちさらハいとうれしく
おひまへしるれひしゆてこそ給はれいと 細 奥方
らうくしと思ひよめのちうらハ給はりおま 十五の経すてとあるひとつめ
との中よ笠ともかん今めもえむと思
給ふの給へでわれどいまの世の人の心
ならざめるへさて給ふは中くむつびさ
きめとやうんのけらよおひまさむら
ことはすくてうんいとそうしろやとくも
とまへとりんとあけられなすしくおまへる
とかね殿よ、とさむまりては大納言殿にも かねの殿に
よくしらうまつりまうさま家のにとよ
てこまわりしよ、いとまやうずしくようし 孟 還迹 わたろ詞也

した 三 常陸妹君故大
納言家にて御流るゝ
おさなくおはしお此が将幼
かの時より姫君の家
まで常陸がもて心や
られいさしの物語を
教しとめさせりひろ
ゆかるとも、はけまた
しこまりたるとく

まことまかしとおもひつきてものゆめのしらうど 奥列 常陸の任よりゆきしまゝ
もうち明るまよふちつゞこそてかし給ふ年
比の御とよらぬくまゝて覚て給てらん今
まもつゝうまうしめ給ざらはらいふら給
ゝう我がてこくにまりあり
とゝましハやもさしとうれど月ごろの 孟 法母とも定さ
れこころさぐへよるやうよこのへおのへん 細 母の心いひ 常陸ハ男ともに常陸が羽指し
とどうん、おひまへそくらう給ふといとこ
まやうよいふかうけるありとうれしく 細 媒の心に
おふすようとおかりつゞうらべきまこと給 細 媒の詞也
うぞられ心ざしハさぞひと前の御ゆう 細 守をそう
しゆうんとねぐひ北がりていそげるく年さ

らぬ程におもひすゝしと。ちんちうの女やのや
んごとなき人をもてなしてんこそ。げ
いみじき程をあ。りくしさやうの、ほどもゆかん
こよしんいかなるひとづさまもわくらでとゝの
んのうひ川。人かうしいとやんごとなくお
かしくあらくおもふまる恋たちゝち。わくらさ
恋ならとそのつくゞおそびゝてもおハ
しまずおと。世の色好もいとよくさる好人
そ。つるとし好而くもいと迷ふく猶かなるさ
てろあん清やくかかやうかれど。さの
ぼりうる人乃はけるひ乃あり事極やう
あ我人のりぶりあるまことといふめりのきと

ひよいは海まりのつらい年四位よたひう
好あん。うるひの歌ハうそうひまくいうとの
ほくらつうしごそまるかさらいまうろ川のこと
うらひてめやともさあそんの。め代すんさぎ
めざかきりや。さうんべきさへこりてもしろそ
とまうけよ。七遊すよなよれしおれバまふ
あそとうふかうらよ年しあげて人とこそ物好を
らうるれ。なのまゝてもまで此恋ぞ。そうとま
ちさえてつうううちるう好女られこうろなるい
そぢうくるさくよ。やうもくちくるんおりし
まをとめろ。おとこ人の此むことを。さらんやて
好よ。物ありうしてあん人てぞよかうめ。すの底

かゞみはおもふところによく
見ゆるものなれば。その人
のむことすこしてはあれ
とも。おもてのこと

このほどの間　細　宮の御
父宮のころは世のつねと
いふものなるべし

さらひあるべきして　抄　かゝる
こゝんさしとみせあるべし
てとりかく孟　親はさりひ
見えりけり常陸の宮の御
つかうまつりさまとは仕
つかうまつるべし
はりのさうら抱つらやうじ給

此段く此姫のゆづりつゞき
とくし
是は母ことなる
三位姫君之が時分を
ふとは別して世の中に
あらずるへし

さしはあるべきこと〳〵を
しらるゝを　明　もとゝを志
らそとは自他のうへあへ
何となるへきはちつるを
親く浮かな世えるべき
よしとゞいふ　師　いう
あら人とも志らぬなど
ここよかりぬるよしく
いかにとみまかりしとお

まは親ともくむことりそてまつらんと思ひく
侍るすれどうるよおもふぐなかりけれ給ひあり
は御さ御めもゆかしかりけるん。これそごう
ちろやおちさこしとうりやもとは。いとゆかしく
まげまひつゞらまいとあさましく八宮
ひくらうさふくらちおもとつさこねまう。
こゝろの内くるさの。心りとあらんこと
いかの給そおきよびいのち侍らん。経は。ゝく
ささゞもさくけなすりてんちこりさるべき
をあぬとうゆかしときこえふらひあへずて。
つらまりけむと。おりのさうし抱つと
やうじ給所く。ひくらめくらさもちうるゝ

そのべきさんずまたゆかしく侍れど。それ
さ海こくよおそめぐうゆまゆりぐさま
ぢうよゆかしくつりきこさせ給ふ。大輔乃
くるねとめしめんとゆかしねひて。世まる
き気をもつさんと志給ひんよおもき
りの侍らずじ。あうじのえりと志うめくゝ
やぶ給まればらちろこそろ心りしねろうほど。
これのはすめるもすよりしかめのかうい
のさあまも。さいまへとあつへきとまやん
あうびとようしげるゆふは。よいとられし
くなりていはゞとふもかうつとあつと
をかゞうして。あまきふもこうりつつそがらんの

まことも　三 浮舟の方
なる媒の妹也浮舟への文
つかひハそつとるべけ
まハうらぬるべし
こくらく　細 贖の字法て
あり 明 贖労し礼を
出そこもし贖銅と律
よいつるこれなり師大
師よたり浮舟よ物を
出し浮とらしつてねる
わらしと孝経かひし
うすとかねの心よわまり
るかてしくくてあるく
お美稲よ崔烈とらふ銭
を出して太尉よ成しを銅臭
といひしすあり 晷記
何か小方と 細 媒の細是
も同しむそめるれど
とく 盃ひくらのひとを
めもとの小方ぐくる
れど何かとりつよ…

しるすとよきなるよかねよつてよしくしく
そひつてく代いくらしけよめでたしと
そくきても孝れバ思ひすらしひちびてそあらと
いらくまくでふくくんらちてそこてね
まかりだ尽よ多すんぞくらうとそしんあど
ぞおやうりかたろくきてきこと。うくと波
つまろ。まそしみかのてよいうくとりのこのゆや。
ぎしことよま母すひんじめ浮しんよひきこうず
へらんひかくきてわらけくろやうにとりな
もを人をおもらんいうやと埋がしるさひろそ。
何か小方をうの贈志とバいてやむてしなさこ物
よきひうしつとむすり浮なりくろ。さでなりのこ
の中代浮…れくこみくとらしも物しるび浮代くらぐらし

月しらく 細かね浮の心よ
此媒の月代の細りハら
いらていでるよとゆりふ
とく お浮舟へ文を使へ
し付く別して母のう
つとらひしるすおよえ
さいそれをかねの思案
もろし
いとらうハ おかねの心
まどうく母よ八一見ハつし
と思へるしともと思案
なし

月　ざるよとりくで
細 浮舟よと約束せし
日を雨らいあゑしこく
打ちくいふとかねのか
まふこしとく奥よりえ
さうり是又文法也
わ方ハえ れそいなき
三 母小方ハ代よりとまて
て代 浮舟の新しりの
閨ここをもろとし

さこくよそひて、そゑすこふとおりむかくし。
あきおりされかなりとさて西月でひくえな
くよのつるすとどりしつてとひひつりの
めらうけよくいふをいゑすらんと思りへど
を代一まてりハつしと思それ。人よいを
らしそしらろとも。なぐく人てよのりしなてと
とこそとはどゆるくりしことゑをそ思とら
てぐれバ目代ざるよとりくでびとうりしく
建かぞおりしそらしめろ。心のきハ人とれど
いそぎこうらてぐんでのさうそくをさ世。きれ
らひるどようしくらうし浮。代方がともりし
らおうそ世。よりつうひてとうよ。かねなど

かゝるたぐひの人は
此清水の主人のかたちをぞ
ありハまことにあるまじと母乃
いさめし
おもしろきことありけりとも
此八文字をきゝて出家
のかたちをおもひ出ども
みちのみちふかきまよひく
つゐにわかれじとするを
よそにわかれんとし
こゝのみとも此ひきうけ
此清水を菩薩ちかのみと
まいらせ給ふぬいもとひ
こゝろざしして只文乳
のむもかはしさひかし
めぐれ人をしみ実とハ
きんのかれとおもんふ
なむさかんへ給ひさり
こしとおもひでゝとも
いへしらじ母のまへく
ます〳〵菩薩

かゝる類の人はさせんをおもしくかつらしさ
主人と家や此や上人をとれたりて、わひ
しら給ハまして御けをするりようりとも。
若冠ある家の給しんさ人よ此かけるくとも
あしりハさひしきしまし。されどうらかく
よそうく此んがりのをとまでハうえ乃
みとも此ひまん此さまちとて鬼え
ん人をも中〳〵此しめさひぬべきこそされ
しられまじさつくいかゞきつかひ
もぎ給ふんをおひすいやしうしくめや
もさるどの人乃かくねんごろなの給め
と。かじうろひとりまちひさびけりふに

中さらのかくとうくいゝとじ
まゝ母守とてまもること
らくいゝひうせバ母の心う
されまじ、こゝろうと仍
女ハ出してこゝろ
このこゝろものどうり
然菩ハ清水のうるまぐ
じまそもののことわき
れバ才子をみる事也

ふくせさをまふきてうちあ
らど 細りそりでくんく
わつさどさとこゝろ心え
師開の守うやおまり
よめでさく清播をうけ
ひとめハ人の手ひらひ
ごくうんをわぎらり
ていうり
りゆくおいそしとてみさ母へ

中ざらのかくとうくいゝとじ給よ。女ハましし
てもろされさうやあらんおそれをもてと
おもふわたしてもくいそうしきよころよ
みをこゝろのとうよみくれさうし。ぞく
めさきおりくるよ。うきとうくりしそるすく
と。そでこゝろ而あるすくおひつげて我をと
ひへふそく。おこれけさう人をとぶらひと
志給ひりくがわげるすくこゝろゆさるさことめ
でうりんれ給ひをばうつをさせ給ふ意あ
らじ。いやちくさやゝうんなふかうらい女
ご縁こそいやえつかしらでのの給めれりしこ
くれくはさそられうれども心ゆいなし

孟ごくせバ、そのむこ
よるかれんとおほ媒の
そひしごく今もいふ
三 かねの御の孫よる
らんとのまへて行きて
我しもあるをかる
こし

きりとも人よハそとり
あらじ 三 浮舟の
しまらのるく
そのれハ、みまいこしゆかしあわ
つうかくも 細 同じごく
く孟子也わく春義之母
の翁。師ハ我ハ常陸の子

とぞ。かゝる人も有り給ぬべかりけれバ、おもはずにく
にをひてるんさうハ、流しとゆるしやつらきで。
あやしくかうかぐ人の御ゆかりんなゝくさくね
人まで。いひちらしわざときこの方あされて
おもいされで。どうりそふよ。世中のこゝろ
うき縁りきつく淀も、ゆかりぬがりそひつ
されて。やそうぞちぬ。ごまわてかりて
まるよ。いとらうさぎよかうしげなそね給
へるよさりしも人がはどうり給うしとは
そひるべきむめれども、かうかう。心さる袖も人
のんかりたり。そのれハ、御みじこしやすしひあ
りしかれど。のぎれゆかりしゆゆかりそん人のかめ

（傍注）かねの君より孫の貫とゆかしつらとゝ／細 奥としてくゝ 孟 奥らくらとにく／細 母ハうき舟を遠度の子ハ抑て也／三 とりくのんて／細 浮舟の方之／うき舟のさ之／細 浮舟のかうく／細点 孟点

よおもひあつらへもも去
ハ浮舟の御事にあらしバ
今ともゆかりんとゝ
まうとそさるくありあるへ
ぬ人と いりうとを
浮舟よさしこえぞよ
つうそめうにあるかさ
そすハことゝ
らうとあさりまめでさうど
と御かう人を妹の御事も
我ハ兄どこさうじと思へども
ちの浦れてさりぐとく
あひくうちう 細 あひ
てく仰のあひさうぬ人
かれゝ我ハ口へせしと
へ義ちの人とかねの人を
といふて
いふとこてうぬ市よ
お別市よわそけるハ文
すどきるとくこへ勝之
のわうりよいて
浮舟いそこうえこと
ともあくもと 師の
もの翁、浮舟のう

よハ今ともゆかりつべくこそおもへやるめ
とまりてあみづりて、ゆさるすくなりあるる
ぬ人をさしこえてうくハいひおもへしやうやう
くにゝくちうことあさけりえうじこさうじと
思ひぬれど、うきのくおもしぶうこまきことよ
思ひてうけとりさてきめれバおさましく
あひくおうか世の人思ひあらさ浮き
もえてりつしよくらうれじとおろかぞ
うてすしぬとらしわよ。志げし。まかしいれと
おるげきついふめのをいとりにて
そく。わが言うくがとしむうとくおふよ。
あるようこれもれさいえいまそ。おみてとと

（傍注）如此浮舟の妹のるし／孟いて／おもひこそと母のこと／如浮舟の母のこと／孟 腹 之／浮舟之／如 同

くひきころべころ井
おかゝとみまうりけり
けさいゝかいわくんとあ
りも忘くもしとゝせめて
のるりよいひろすくさめ
さの個に 嗟嘆が
うくしれる命とも
血涙弁の為人かりと
もはが孫のくろそうて
おまりしてとめのよ
みて

右の五との　細夕霧がり
侍家の小袖えし紅緑
の女房ヤアマ八蜻蛉よ
うせまこり薫のとぢ
かけり 嗟 薫とひきあと

を忘くぞりくゐくちおしくいかうしける
忘るれバおゝうしけり梅ともうしらざる
おし。まり忘どいんとをあり抱きひきりさ
らん人はこそえせなしまかりくれ。お孫が
のけさ梅くころの。個のつよこまらしよ。
さし今のかりかりし行しう机。衆よくろさ
まて孫るられもくをうよまうをてさうと拙が
しよりねりしと人ハおるみ拙そろてや。今の
りよをこけバ年はおかろけるすうん人へとがを
どとのあく。右のみか展。掻家太細ゐ式
アマ女るまどのいとわん人、ろうよ孫のめうし孫
くれど。えくとくしてみどのけりしつさ

むすめとえまくる忘ちいくぞうりの人々を
かまあやうみはおかさんのえく女あみどの
けるるよわしきそ。時どもえんとハ拙かし
りしまんそれりさげよめでてきれわるら
まれどもいとむぬいさうる人べきこしとわり。
ろやのうん人のくさいちハど人と世よより
どの孫おりしそるよおかりしまれいられハいうぬも
いうかとおさんすりん人のえこそめや
そくよのりしきこしとかはおしめ。親が力まそ
をおりかさ。右女のけまと孫ハびしとるまけ
たまき御しくいうくかりしく拙もせうり
ど人かをおもおかさでつもしくハいうぞうり

その法母及ほどのけりさうり
かしをて　三　薫のけく
のすゝこまどよハろ孫
もせんどうんとし

孫悲しくまよ孫り
お大悲のるすゆへ抱をた
かをとうり

親弟としてもえうわき
三 涙弁の母も八女の
かしす豊隆くとおりひ
らんべてえく

なつふあい行なく
いつて 三 今宵のおねのすを
なよあつねしことをハあまそう
めれ。なよいさどもあるす
いふしろひさんひても胸を
くるしわさうくびりとくく
おん宝てき市わりとえい
こじ兄わすりみも身の数
ならぬハなんとなりしくし
よろ何のさけ殺身うさらな
まなりともえへいよろ川よ
身のわしお目もごくハ
こそなきさんの縁をを
もむもとハめされハ嘉へ
りしは浮舟のありさまを
なりしとさとく
いまよて今宵へうそを
孟いふ宿うもしてよく
ありけりくとさきまなれ
と母とめのとくるう
みく
ふりわてしさらくわさむまで
なるに万するらくさうして
思ふらうとおりとまうてみる
よ六を絹衣を乳御役める
ぞいふ罪そば供にてせんと
のみしの方にちそ
七男元の方よりか女
○どうしてかねまあ
いせんと守かりて
めなときうくてまはひりへ
るよ 母のはあのしあに
うくふまさし不と当
陸ゟ祝してこいそに屏
風をそろて本ごふえてふと
なり

松 常陸と云し
みちのくつゞらしこのいとひふかひ
なく信なく海のしさんへなれどもひきとを
とひさまみるごんなきどられどもくやとく
て年ばとまるしつるかりおかりふしのん
孟 常陸
どくのかやよあひだすくようしいるさここと
こそみくなれおげりしくうくめしこそしと
とすくるきまよらいきうひてもくるよおえ
ぬもしとしわきつしめいよぜみてくら
しそ。こやびるよこうとろぞうしきへの浮舟
ちりとりふれ。殺うどるすぞハくひあらぞよ
ろ何のもし殺身りしたりくりと去へばよ
かるはすしくそことなけれどもいろよしそし

母ハ常陸の御こ浮舟の
ひしふしへすしんじ。ちくそてなしんとうくこ
孟 常陸ハ殺むとめのすどいそくし
らふうらんいそぎしらて。女房るもこまるこ
ここの女房をまおこまるへつ見とを
まめやすさいおかさおるう絵この内どハあ
らせまへやぞそ恨るどもあうらしく
浮舟の方をいて
ちそらわさあうそ絵しと少はうよあり
よふあれバとりまそしまくわしらむ
おどとそこのみしれさふそそうらぬ
三ところにさりやうあうなる
とくちつしひさしく。めやすきこ海よ
さいろかよ。あそうりくもとつきうとう悪なる
三 しこびそんうなを
爪とさるちくよ屏風丸りそてさでいふを
厨子 二階
きまぜしそそおつめて。たしよりいゐくあや
ちゝさまくちくへて。ふとやゝそていそげバ

られ、世に母なきにハなく
やハ、孟母の方へいまのむ
もとめまゐらせんとそよそ
とうしてようしやせよ
母なきこゝもあかれど
ふしいかく
めのとしかくりるそつく
ろひ　三　まるのうしつひ
むかしのみやこよとし
もとくにくやうし
姜詩のとうかもし
あるひ人のことふ母に云ひ
うちへられなくんへうしと
とえども　母の孫弟子と
ふひきへらけしへと

世方こゝろしくられど、ちゝはれでとぞいひて
しらべてよき〱、はゝさハ孟母ありてまゐる孟（明 孟母三遷子教 明）
ゝりうき人のはゝハうしつまゐらせて、ぬしぐ母れ（細 ちよの師 母のつゝきんくはくしとらりと勝立訓し）
しまゐれど、さん〱といとうくハ、ともへまゐらす
ら給ひてとてをおひつき、されハ世よ母なきこ
みハなくやハあらしとて娘をひとりめしよく
やきりまでつくろひ、そてけれバ、おかげまとも
あら、ば年十五六の孫めく、でとちゝつきやうよ（姜 孝婦のむすめとめのすこし）
かくしうる人のうちとかりけまそて、こ（おかげまゐらせ）
これぬ方との顔し
このかたかくらず、そいとかきやかう、これ（孝婦ハ）
といしてめぐくらしと云ひしくるそのくろふうまる
おちのかねのをとりあてし
りんのことを海よ云ひりうまんへられりうへんまゐらせ

ちよ何かわし舞あかく
云へとおほとし
まれもくもむこよ
孟孫もむこよもろまね
しくもるを嫌のひゝ
しと孫よんめて孝
孫をいひく

このかたのつゝかしく
此書孫弟の弟子かたの
いつかしくし　墨本代く
のかとりくもしくとある
手話れ　斯か持も嫌よ
いうれてつとくろひ
すうれえいよくいそく
流 文をよう
あつけくきゝけとかる　三　孟母と
ゝくよろう

りと云へど、人々しくのあつらしくくらくらく
よまのゝ給ひまゐらすれバ、それもくとしことまと（かねとりて）
らまかしくすゝ人の給ひかれなよこそれるる（細 金よとりて）
人をくらかしくてうんとうの中へよそう（そそ）
られてりよをいてとかうり帰して……こ（銭かねのゆすり）
ろおはゆきさい、いかめしくさふやうかなうく（細 実ってまた）
よろ川のつゞきあかまじうもひくこその際も
くへどこぞそめぬらく云れうこのかくいて（三 孟母の母乳母）
あさそうしくさからくゝきこやこるれバこうこ
こあるふもこしろつきるけまハ、家のふかる（細 中まかし）
のれりとよれハかことまゝぞそのつとくゆしぞ（細 文の首）
くゝまれくゝやとうしとまりてえぬすひ

よろしき所へ入らせむとは
ひとふるは
細 ことさへとそ
師 浮舟を所へ入らせまほしくせまほしきに中
君の御ためにもよからぬひやり
あらむ不便なるべし
おほつかなく人々の
猶 たゞぬ身ひとつの後よ
くされもおはしても
御母の方の心ひとつによ
てもし此浮舟を後にも
くしるはさうと思へる
なり
この家のさはりあるゆゑ
孟八宮のおもひめしを
ともぬ人々されにくと
中君の心し
又こゝろにても世
又おもひれんも 孟 溢也
師 ありかたくあらぬれ
さまあり中君の志の
うしひまへも故宮の

のみなむすくみたまひしさまを、おほしいてつゝ思ひし所
ことしゆゑ、おもしろくあらぬをさまよひなり
なまいとしたのひてさかしひ給ふあはれなく
れのちにきらぬとも、もしくらればあらんかし
すしぬ身ひとつのなけきよりもあはれなど家
かくことのそゆかしく御世すればよろしう
うさみはしまりんとも、くさうさへくきさ
なる文とおもひれどはこ給へれど、この家のさは
うちゆかし給ひでやさめし人とさされひとり
おもひてさりくきらんもいとつてましく
とぐさ きさ所にて世におぼえんもをかしく
どう御みくきりんしてかうしかりくるへき

又おとろしくあはれなる所にて、いとほしく
あらぬれさまよふとも、数ならん
もらうしきこ
こゝろなる事あてやる
まちりけらん
師 さるにせよおもれんと
まそにぞ我も妹をもし
とらおりさ給ひもあしくて
りろとも、世にゆるらむ
さき給はぬんも故宮の
心にあやしうらんと
こゝなうにてそは 師 く無
おもふは細にて給へめ
ものりとみなりけすくのまふ
やうにきこえて
備ことにいさめ聞えし一本侍る
くのおいせしるとあり
ておいて八宮の御許容なき
までをりぬしるを
ひとしりつけなめれど
多羅あるふあるくねど
あへておいそんとするべし
りの程なうまでとく

世、こゝろうくしくるくてりくこゝろよちりがわれ
人をかさこ人のれしなめるよしろしろへさわ
ふ我おりしもつくみさしふありさへし
心ぐるしけよいひやりきぬれば、さくるやう
しそへ給ふぬひとよくそしこるくりあ
の給ふ世そうもとよりのりの人のれ
中よめでけ給をこのつぬれとたちり。
おありいとるさけるくの給まうさこと
おりるなど申してさるばのかしのこゝろ
くろへさ所しおきくいとむつくしけるあ
れどさそしもとくり給ひけべくはさそうしれ給
とひつかりつゝいとられしとゆかしして。

母の方より浮舟のをとりひやりに
細 御心に女房を 師 大輔がいふも
細 大輔が詞也
世にはありかたかりき
大輔が浮舟の乳母の詞也
細 母の心也
細 中君の心也
三 八宮の御許容
中君ならの所に

お前の御霧居なりし
あくかるゝともののそれ
しらと 此かねの事如来
さか中へは中君へ言へし
しらあれは此事如来しを
なかにし嫉妬浮舟の思ふ事ゟ
かねのあつかひを
孟 書薫ゟ物すとくれ
儀藤せんとい云へども細
人へみてえぬむき
ともえらぬとらく
あつかこうぬともを
花 東絶ヘ吾相公の意
見よ見ゝらりらんお抛
うらりにつきまあつま
さなとらり略記し

人あれど、かの御方も(細流云)、その御あたりを
ばむつびおほしまさりしと、みなすれど、猶く
るしきものゝおぼくさうらひしと
そみづからかねのあつかひといひなかりのでさ
きこし給ひきんとみよ、そのこゝろくしう
べきこともえしらぬなふなじあらはれ
なかあつまらぬどもとなしまろうてな
げいで見えひ抛もとろとさまでならむ
らびいそぐのくありなる絹のすなどは(かねの下人なるへし)それ
とゆくしこゝろすけよ抛りひなれば(孟かね)くゝも
もんしなき
いとわりくいふしらくとりありよき
つまとちひかり、かのこゝこの後とらしてく。

ゆかしうしの心でいさのひ
と 三 かねの出居世給ひ
そかねのつふ人のある
ならるへし
源中納言のこゝりは
孟 薫も常陸守之先
腹のむすめの事之眠
の流くこゝりまらうこ
まこゝつきて
蕃西の方とて浮舟
まこうふ所よハかねの言む
なり
きうしハ君ふありうり
お中君へ浮舟をまて
まれにとりとりのふ
なき也
此流りこ毎よりまでゆくへ
細 浮舟の方よ數寄子
きとそうふて人のあ
るかうとそふあよ中君
まれなかりと来りむ
つぶるし

かしこうんもひがことうんどそひのんし
て、あふすらましよまうとてくるゆうかま(賓)
らしものはでいさうつしひとえしひさて
げバ人ハひかなれど、源中納言のこる
ゆはあらむ。そのでなしの場は、すの扇を(孟 浮舟の後の寄む)(常陸守のもの君まいりてと)
すこ。これはこよ御らうとすへつきぬれ(仲よ中君の後しある方にかうの後付しく)(かうのあうさ君とも云々)
ばらしなど限りそうてもうんよ、すなは(浮舟とも)
なんものかそいそかしく物かして(細 君なもるさ取りこし)
くそひめぐりん限じ、ためよくはみなまの
かりこのけしき海よりぞまんなふ人のな
き絹おれづりなめうと云へハこしよ(孟 中君の方のるし晴)ゆうにら(許)
くぎらしあくらとあるなりよ来りしと。

みそのひさしのおすまゐ
三 二条后そのまゝ
さうしにかたらひあらをと
哢 浮舟の母北中君の
ふ人まつりし
つくりまうとひしなら
哢 此方よりもあさと来
づへとのちらひまゐら
つましとき
らうへ八の猶のこと 細 白の注 伊浮

浮舟のおやの事お浮舟を
処人のとまりさ人で二三人ぐらゐして
しのひさしのかよかりて人けなきこと 細 白家の注方よとうへ
よつかひしらう年比くらかうりつれ
どうくゆかすやうしき人あれば来るとき
へんそ給ひなとあしまりしくけるとひ 細 中君のこと
さふくりの御のあつひとをてかつ
御中にて相うしや正しくゆかゆらも哀な 盃 中君の御とお方
まね枝も故小のとしといへるすれをゆくひ 盃 八宮の北方と浮舟の母の
とくハつうまつるとうひしつらようざ海 細 文づ人きしのとちらひ
つられなくてぞくらむしてへ人ある
なづりとそふ八かく来るてむつびなご
ずもあひぐさゝかすしらまへ八猶ひ

こがれバ人もりよりぞ二三日づらさしも
かくらうとはうろのどうまこれ故あ
まて海をきうたもくり給ゆりしくて抱の 盃 白家の御出方の
ハず海をりきれバ人とさらりし上様とくり
ころさ海しまそハがよかりし人よ忍てつら 盃 常陸の守と北の方の
うらかしくれどもうつまはさりどやへ
ちふひちのと うりさ海てうちと人乃
仰ども、らまくす 宿の給四位どのとお
ひとま海づききつきひてこのえんのこと 和 膝までて
とかうりくのとしさもけりてもらそいと 啓え御上達給かし
みまろやうるめ位どもとかりとまうぬと
りゆかりハげまとこの末なぶのぞうよ

舟の物忌まそしうくり
給ひとてあ常陸お方より
人をかくくしくあくお同
こそらは 細 常陸の書
白家とつんらし常にも
そうりよわうくし 盃
かハんそうらま中君を
そろし 師曰
せそそうくゞ様をかり
ろ お白家の注て海
あり老 陸々妻のもと
てくんきりて

うまし日の 細 常陸ちる
の子常陸六位の藏人

式部の亜相よみし

ことよせてば
細 前にいへる御心
てそむしろしてハおき
暁 荒のをもしと薫
しほりもしよハうり
いつらしき折とつれ
いかんつくそふし
そのくこいうりさゝも
盃 瑟りりんらそつけき
七夕の年よてもひおふ
ハおふらハ面白きさ
やゝなりに

て荒人なる内の御使にてまいれり。なれあさ
ちへも見まいらせね。折を見て出方こゝろまてなく
つまふも見ちらく集つらぞ。こてよなまき人の佃
なりひまぬ。わられたこえなよんぞ。りくらなれあさ
つまよ出てすなめぐくさぬよ。しそてよ忠り八時
いめぐくさんぐとせ出も。つらさめらせ
絡ぐとも物らとそいつらおかしこせつてへお
さおしろよ。ぴれあり又海うけらしとこれご。
いれがこぐらりそもゆくらよこよまうかよ
きんいかしいうしろんづきわざられとふふよ。
細白文之盃 白文の心ぐさまて
もら衣いぐころそて川ぐし人かゝまず。女ぐつも
見しうこ本てーとへふそてかいもうかさ。不をし
やりらくめうじうらし絡れりくらじもとゆし

人くまりあへぬれど
おかりて出き人々く
まうとし
•まりいくしくるゆよつて
そこし
の海とつハらうおさ 三 書陰の家
まうひとめもなくそて
お浮舟のゆをなそし
かうしの人まえしるへ
一もなりしほとふく

きうりにかおひくり。こ宗めのさびしく出もし
とれあさ海と出りひらくづらよ。宗めさら
と出あれど。いしこてよなさくまてよ入て出
なれと出が西本様のうちよいり絡めれど。
りら衣いめのとなじりてあそびらて西。人
ぐ見りあ川もれど。なやまりしそて出わもの
ごりくらしつれゐ海いてまさよまつらさろ
川のことなさく。こゝろことよ。こ香れバこも
がつしじらこし絃つくをと見出へど。うとく
あさ人のおくりハ口おしらなへしと出ひる
つまあれバ。まがむもてめとなやうまてさしてな
らべさらんりうさ日なりじうし。ゆかげき

ゆかりまどころるがしくけ
ひこしるきと
常陸のむすめをうしへ
かし院おもせ人とせ人
大輔母よハけらひとよ
まいどよらられバせ人
しおそくしき人とえ
いふ示ありしとふり
けそしく人をきこくつ
つふぶらさこいりしく
かこすく　孟　よしつ
りぬ人の少将にうし
しハ舟余ろべしと
陸舟のしすとせる

いさよひをきしのきてちくめしの、命婦とこ
してんとぬりひさろんぐ八ぬすりわりこ（此少方の一勝なく）
らうけそひらよるき紙ぬよふを、秋のまかれ（陸の母と陸舟としろ事とぞ）
ぬとんもろくつふぶらきらと、夜ひて
よあらぬしでるよそひつでうら、宮日さ（白えし）
けくぬきさすて、こきいの夜れいのるやまし（三　是ハ明るあし之　明るし）
くえすへバおいるべしとそ、れくしそくおにし
給てかくみす、ゆうしうぬがしこのぞけバうて（今の宮）
しくひきつろひすつるそくさよかぬるくけ
さうくおいもつき給うて、わうそと
えるもそ給そで、りそめそバおそすれ
こはいひるびきりてぞこしくくり仏法

けさうりてきりしひのこうやす
ひそろんで、ぬまぞきりて地むしやよゆり
中よきうけごらておぞうしうさん
のもる夜じさうかまくろうてそ、終そぶらね
きしろわりぬまへそてるよしとえしぬと（白のおもてハ地の数子もえるねえ）
れぞ此ひしらのてしむこのかねる、えご（細　中納言任子芸居室此かるとえて　ぞう）
めハらのれうさふしるごめるぞとうこのむ（法外の事）
そめほらそてしそこうされめるしいひて
うじけうらめのほくしとえそろるりらわさ（嗤　若く尊長せぬといふ　盃同）
このれあくりの人かりてもいきるでうむの（遠慮者の事也）
らぞのうきちうらくたよりのあろる
つもと、そのかどらりふこそろんとまえて（細　此少方の家ともえでぞこし）

ありくしおさ人の
細　宮まそいうしもたさこと
すり付く候労め候のハんりハ
遣り而常陸ハ寄乃
左近が持に
るそし訳たかハきとくえ
唯武官のつよのまくえ
山杖云外衛佐ホ任意
不当之至ニ近衛次将
若敏厳上並妨仍宿
侍ル時副宿物上
自余不能持上

いさこのれわこり代人ハ
是ハ左近かれのうへを
まこりハ人日到してふ
調とおくのとうのハさかう
のこうしも　陸奥一とそく
うんのきとれうらう
嗤　常陸宮急よりあり

斗斗みの君の御ハたゞ
ねの急ぎ[illegible]

けはひ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
孟白[illegible]
[illegible]
の囲[illegible]
[illegible]
ゐをあるづくうく母
の御ふく

[illegible]
細白家の御[illegible]中家
[illegible]
ぞ[illegible]

[illegible]
箋[illegible]
[illegible]

人のくいふにつけても心つぶれておぼ
とめやすき程と思ひわたりこころもとな
しくげなるこしかたの[illegible]
ひくいふべくあるまじうしく[illegible]
わか君のおひ出[illegible]すのつまなるのぞき
まへるを[illegible]
られにうらうらと[illegible]
まゐでゐん[illegible]
むぞ今ハ一[illegible]
こそうけたまはれとて[illegible]
ぢしていそ[illegible]海のくへを[illegible]
[illegible]

まハいそ[illegible]
らぬ女君のれ[illegible]
すれバおの中[illegible]
こうへのうちを[illegible]
なされ[illegible]
なる人もこゝろやさしく[illegible]
よるきけんをの[illegible]
おこゝろの中みちも思ひ出させ[illegible]
わりなれば[illegible]姫君のおり[illegible]
あるめくるこその[illegible]
らゐのさつくお[illegible]君[illegible]
のうしわくらかきさかつ[illegible]

ねつゞはさひおぼされて
心やすからぬぞなりゆく
細 母御方のおぼされ給ふ
さうせのまゝに
ね殿の御方河の
御意のほどを中君の心あさ
はまさりて

世にしられし給ひなどしてまし
や 細 高貴の二条にてまし
きこえまうさせ給ひぞ給ふ
晴 女二宮の大君の御事の心

すゞしかればをとしをひすぐすかべきにお
なにもあらぬをいみじきのみさせてなりゆけども
まだうちまさりぬるは中々にくるしきのみこそよそほひ
給ふらんとまうせさせ給ふぞなれは大方かれいかり
といひこの御ことはかのかみをいふらくこそ大
ね殿のさうけてうれしくのたまふぬよし
とゞまりつるあさくらぬはいかのみ御心にとどまるよ
つけてもいとこそこちかしこまれる御かたぞ
大将殿はさらに世よりあしきをまさしを
かどのつゞきし美しさにとまりくらさんにとゞまりて
給ひしかつてやまさしくいる給ひこの
さうれしもらむ給ひなどしまして中やなどにし

とりかへしまつりて
とゞふなり
いさや宮とのかへ
細 中君の御心ならず
大君にとまれより大君
もつゆしらずとまめ御
じやうの男の御心に
とく
まことねよつけてぞえるく
か奥にね給ひからぬは
くさ細 ことも思ふに
かたちときさまかれども
大殿のやしらうさま
かたちのかほつき愛に
うしとかかりのやうに
さりとてあひみえまする
ことうのへてわかれし
薫の心よはどを加げるを
こうかれづましさう女
やせんとぞひおりへよ
おろかねど薫の給ひて
表にとて
一ありしゆかまそかし 細 無理

いさや宮とのかへ
いさや宮ののたまへるやうなるかたへかへり
たまひしも中々いやおもしろくそぬよ
つけて心よくをかしく世よくしてたくさん
どの君はいかなるおしんおやらさせて
細 薫く
ぬるそれしをにこのとの世とてへ入
やまふくろうのありて給ひけるなど心う
三 八君の追善そんなかく六条の大君を
つらしうくらり給ふの手なぎこしはつけり
細 母御方の御心 孟 浮身を六君のことなど
給ひてらんとこのまゞるらぬ心をさんなんか
の弁の尼君よ浅の給ひろさりやむとひ給
へうつべき御心に御ためなど一かりとゆへり
薫の心を我表と思ふなし
こそえてうきさけるはしとて表のよきなん思
まつらつれこころうきかたるとしいとあつ

くいそう孟賓の一りくゆ
へまむさしのこゝく八君
のゆかりとおかしめをゆ
へよつらえしとく
人もきてそりと云ふよお
将の　三　かねの浮舟と
遠妻のことを人も知け
つことさひて君のおくにら
しらくし師よの女房達の
らね[illegible]とみそてひしるに
母のきてくらゆへて
わきよりて山や
抄浮舟の上を云ひ侍て
のこす
さらにまよ世の中と云ひけ
えそれにけり
孟浮舟を出家とさせ
となりんとし　師　定り
あらて一向よなき世乃
まりと云ひ給んとに

ぞよこのゑとりそてよづらふこともうすく
くらうこ侍りまハあらくゆどゝ人もきてそうり
と云ふのかねのゑへわるゞりうる侍るど
はのめりしてハのち侍らんかぞりハず守より
網々のわくさおらさるそてこそくしつべし
くらゝそ給ちんぬハかとこらをなるさ侍るよ
らりかひ待らんかわのしさよおもなとして
なさ山にゑしもへてきつつそる世中をとい
ひそし侍らましあらじらんと云ひ多く侍て
ハおゝり侍らふよけるよらぐらし沈れみさ侍
よまハあられとおよく人のあれつる
れありさ侍ハりよかりわかる人のさうよ

しけりそのおかし
細中君も浮給よしえこ
りくんさて　よ文字の
まひ君し身ずるまく
なりかくし

母君いとられしと
おも中君のとくの身より
らうらきるると

こそやわてしてくきけるく
お八君の浮舟と教まへ
給をきりしよりへより
わきむつくるてえじめと
おもろうしと

しそきりうとゑてさんこりしねりくなり
ぞれハむじけよそのさよ云ひるそてまさ
し身となよらくらりくよみゝふよ
れハまいそいしめりすじるされくしなりや
つい給らんもいとおもしげなりれさ侍り
こそるどいとおうとるひてのきんハ母君い
とられしと云ひさらずのびらうさ侍か
にとおしみうぬさ侍してきこうけなり
こよくこそとゝるまししうらんひさら侍り
かそしけりこゑやのつらう～るまけるくお
ずしきあらうり云よいてもひとけなく
人よもわるづられ給しき給れじらうさ

らうく鳴の表紙なりし
細 常陸国よおわりハきぐ
のちさ旅のさよ紙継た
是ハ奥羽の君よぬさら
時のさと譲りく去りく
むまれりまのあにうさき
うらとよみる浮橋のさ
へ、花 志れが名のあまよ
うきうちうきさ橋のうさき
てさひの所の世よりけり
孟 入道大臣ハ只下に夏
立とりなくられハ筆
藤まよおろ名く書く
我身ひとつのうき
みさこのまゝ身ひとつの
うきうちよるゝつくの
世をとと根つゝる
三世 月ハむかしのや
かうれえん紙身ひとつ
のこめよろわるらに
喉 命友首行れども
くえ山のわりさ同も
細 多りそ常陸の浮乃

のまどや入中君も浮舟へまろりけてとく
こしさせ給らんざくらまようけくなんかる
三 中君のつく教ず、匂ふど様ハ離く
しへのうこのりゞくさとゆらなど年ゆの
抱でりくさらし海の哀もりりしこしくもゆるしい
つ我身ひとつのしらとりひおいとくろんへこと
るすきけくえ山の書き海まちくおきさくしめ安
お書いつしくて抱ひと
えさをそていつとくいとくてさろつ
常陸の紙ハ紙を移
しくさひきへまり給ぬれどうしこよはる
おんとく
うしぬおやしの抱ことぞいつよましさは
ざりしめ待らんざまぞがよんおくさし
くさひきへゝるゝそうのほしのおりさ海よ
細浮舟と中君へ住
とも紙やつす ハ口むしさりのよきん給ひりく

のこしくをとより 数文浮舟ま書陸の体書かうらとせおく行つひ合をつさく
うりおどのありさま身とやりとハ 三 手紙の表よおりうりと身とやりとハ
ひ悲ハやくまう世出し お浮舟とハ我身のやうり変行の表をどよハ分まじく されハ中君
へ但世なりくんとハこち
あまとく
けりこゝろしりそまあ
らうんと 師 浮舟様ハ
らうれさ海よらまよ
やうまハおろせじと給
やくおりはみえらしき
あみつく世 のお事え
をまろくどうおりそき
うへてきんらつしうみ
さわれとおれ 菊尾く
まゆようこめいまら抱り
らうしこおうくられ
ま海のくえやうなるを
のうらんづつひなぞう
どなきこのへおろびそ
あなとの身ゝ お 菓のお
しもまおふとく

世おくさそてまり給しらしまどりこころつきこゝ
細中君のえて
くれハげよぞぐろりしくそでをあしるんと
孟 浮舟のさて
こ給つくらつもらず海も先よくいじまずくり
らうしげなら抱んらじくらしもせろくしう
抱別ぬやくよりの御ざまと
ござ海ようこめいさろ抱りしうてなみうし
らうくさふし海人でみをいとしうくられて
孟大君く髪大
あまつり抱るずいひさろきむりしの人乃れ
君よりく狐りしいちく
さ海よおやまつさまおく笑くなりりてぞあ
孟 菓く
うやうの人でさりしめ給人まぞせなおくくず
やとうちさひ出給おりしぞえ抱食手り

二　このおとうとの母君
三　冷泉の母とつく

えいまいらせ給ふこと也　白
葉の陰翳実なるしとよく
むかひておかせ給ふ也
孟白と葉がのこる所中
葉頒く葉つよ句文のある
らひては筆せられなこと
のおふく句文さして葉
まとされしかれ初にお
るりがたれど中葉の細
まそへ紙葉のまいふされ
いかならんのまよなるや
一体まむかひておかせし
ま前をいひふれかまれな
うぶおりしといふまでかし
細孟の本帝よりいうべる

給ふ人もまあれば例のはま一つひきつくろひて
ひづつみはそこのおとうとの母君いづこにおはします
葉をおとうと人の御おすゝめせらるゝとなり
かのちかう見ゆる人のいつこにかしこもる物
まゐりぬれど冷泉の院の御後にはえまうでたまはで
孟白のこと
給ひしと人々は前にまうさせ人ぞ御さやえ
中君の御事
こそ御しさぶらめとて、おかへりむかひて
おはしまし彼方にはとおもはせたまふ
こそ人々給ひしかば、ありそはいづれを
よもくともわれもいかで紀人はひとつ紙
さりとも、くちはてぬのか人はいでまうらむ
白文の段をさし葉のおくられかかせ八さしそへ
てされどおまへにはおとされなり給ふは
細白をあらそひて
いうてうのいりの人のかたとはかりくれのてやら

夕顔の葉によりひてて
みくらへてまひしらるを
のまふく
「ふりわうらうらん人々
発　冷泉の母君大相に仰を
まくおはでかけて人々の
細かそとも万御親味の候
よ為さがつて万々給はなみ
つとうん句を切つきつや
ゆうされたら打とよ
三　東よりおうこしかとの
まかし
まこしのよ見てしらうしう
二　御こしられども
かうし

こやまらのまよらのひきく
まうし　おぼ御中なえて

らんものを給はいまぞ東よりおはりまゐりたり
細き給ふれし冷泉さだとさふとのうり
葉の
ときては御いとしう浦まさで、とのひのくし
葉し
まそとくみとはてる給つと、まうされさわぎて
右方の人々
ゝのお前をいり給さ御とされいげはおわか給へ
孟実なる人なれて
でさ、おりしけとなりてみりもぞ冷め
しうあそにはさとげるのやもくらまを
葉のあなりげなる給はとのつてかがかなつつつ
えずうしそひてひさいぐとにはどもと
は給ひて
のまつくろきれて心をうけはおくしは細かに
くまはなるさゝ冷ぞしまつる、肉よりり魚
細内裏よりの御給
わふ
ひとすくなるふへし、前どもとのけしきひあま
ぜん
さしてこん、右の方のなやこ給ひしうけ
細葉の
給ひりて、まゐりとりしくいちやしそら惜さふ

のまつよちにし 中 宮の
此にうらなまさらの事く
なくなどのまふし
此あやはさんによ　細 白乃
速きうらしさまなる六中
君のやむことなし
御方の匂宮は中君
のちうめせりて他の人
殿そこさいかれての給
ら細し
女一御よしかりら
細 おなりしなど 師 宮の内
薫 いとまらうすべしと
みこくさしらわうの出給
になりさくいふまうぞ
とい白宮のおかせなま
ふうこうさうなくてそ
此 宮のうらへおかしる
としし
さうりはうそしくへ大君ちかを
うしまいりてかせをへて

らひ給はざりしかば、いとおしくこそおはして、
孟 白の法らうりよ何非佗りうとも
宮の法らうりよ今までうつらひ給ふる折ふさ
解意 孟白の風気にし
とひとけざりつて気しきまへるとおもはるゝ
孟 中君の猶し 師 宮の法らうりよ行ひ文
これおやはららにとしうらりけるしさをそ有らん
君が弁への紅梅之
としさくしまへかげりはどうるすしにひやう
かうき給ひつりよすんとがらりてうけるし
細 薫上也
給へ宮の内よりまう給ぬるとこすなるそしく
ろうしもおりしらう有あり御の御心にろ
六君の事
つゝげよ世の給ふなようかれてことにやかし
への事されりて世中のあはれく故海ふる
かしとおもういよいひるさでもあめられ
中君の事
へ給ふしもいたりて世をへてしらよまうられ

給うさうらはつひそめ
てしりのみちうれは
薫の君実よりさもおもは
給しむりしけり浅うう
といひそめしるなれは
今もなおあるさやうに
はあしとかりしやあ
らんと中君の推量し給ふ
ど薫は実実よと思ひなのふ
やうにとく
いとまたくねはありわしこう
薫の心の哀さと中君も思
来るらねはかひうりあなく
何八非本石皆有情 白氏文集
心非木石 遊仙窟
うら思ひんらんぞやむり
細 薫君せしとうさらしむ
まみせしみそくさのらく
うのへうさのまひ如く
哥 浮舟のことこそさ
よりうれうかなはあり
しるし

ぞのこれはあらんずる御あつかひどもこそはいひそしめく
細 薫君よりもひたすらやさしきありさま
しこしのもちなれば、けしからずうちしど人のれいごとなし
みやなど心をしける給へとんのれいおもしろけれ
あるさ抱るれば見りてもまくよ哀なる
中君と薫の事
此んぶまは紙いろ本こくわばおもほしあ家
くらく哀し給しとも御猶られば、いとゝうる
中君の心
くらかげさそかくれにうろやむか家こ
浮舟の事をうらんおかし
ささをとさせにずりしまわしく御猶さらの
やあしんおの人ださの給はぞくいとあびてこ
細 うわうのらく 師 浮舟も宮治にし大君のひしのちゆりかれどく
のまくらりまかるんとはのめしさそし給をか
れをとるべうくのからいをにゆりしくありよ
よれとうらつけるよとうんからかさ

はくらやましくれ
田ととくのみちみちぞ
さらうへしとくし 師 絹久
この意はみやみしくハいそ
おもひ時くうへハあする
このあふあひまちくらをよ
こうへしとくし
流のこれとと 細 大意併
まこの思ひりまふは例うり
師 中君の浮舟のるとの
まかせおもい 薫はのかれね
よつそくの例そくいまく
しとさうく
こしんの 細 みし人とハ大
君しら、ろハ人形なる
で御とハんがさとさすぞく
薫君はそろくよろび
の大君形代とろうしてたか
そとりのく独ん大君のき
しさと見よせわしてしえ
らふべしとく 師 浮舟を
うくしろとめく身のりき
物とハはゐのけら人ハらぬるしく

とおぼいづ。いでや、そのほんぞんねがひみてつべく 薫の詞也 盃 その山里の本尊とのたまふ
はこそ、たふとからめ、時ゝ心やましくは
中ゝ山水もにごりぬべくとのたまへばつひに
くちをしくそでのおひしまと、こゝろやと。限の
うよひらひ結も、おしうをてあ、いそじよしば 三 中君の詞也 浮舟の母の 細 薫の詞也
つらへさしさせまへりし。これはのかれん葉 浮舟の母を
こそおいつれハゆくゑくとの結をまゆる瀬
かられ
薫 みし人のかたしろならば身にそへて恋しき瀬
ゞのなでものにせんと例のたはぶれにいひ
なしてまぎらはしたまふ
中君 みそぎ河せゞにいださむなでものを身にそふかげとたれかたのまん

つる我かれハ薫のかよの
とくとしいとく身の大と結
ひしく
ひくよおもてさは 細 大ぬ
さの引はおもくさは緒ぬ
れるとへとこへそとの
まさりそれ 師 氏がい
の細りそれてくさ
はなかりとよぞり
つみまよる世ハ 細 為女さ
とぞ石にしてそれ流て
もハゐまよる世へおりけ
さよのと
ハさられなきさ 細 薫の身を
数ハしあかとえりまさせ
ハさこ母浮中と 二 恋
純はまかにハさうしそとく
いうそとあくさむつさしとそ
お中君の身をかくの久
てひそてハさくさあてる
しとし

そのけしきのほんびんひんそて 浮舟の…
まことや、さらぬきぞれど、いとおしくぞ結
いつとおきさえ
ひくてのおゝせへ、づつみよらをはうら 薫の詞也 我心の…
かみす中君よりかぬ
あゞやひとられさやうならぬ川のおほしく
みをおもしそひ侍られ、なさるずらるゝる 細 ふかくて中君の薫を…
捨がかちくく
てりのいひし、成、しくぞりいひそてたすくまんへさ
こしそたねどいひつらうしらかりもらうさ 細 中君の詞也
くれバりそめよりのしるしらのへまあや 細 浮舟の母の… 薫の言葉也
とふそせハ中君おやしまんしく
とあそふらんとつはしき故ころひハ為緒
とくつ経にとぐしらくやつと、結まうら 細 薫の詞也
此せひそうくくけまへとく
づてのはらつとよりうらろのひりがひと 三 浮舟をまでてそらし
さまりハ薫ののまふハ浅さと浮舟の心ハあやうら
しへゆうとらちつけよねどわさうそくひ

細 薬王 いとゞあつく
ふかくの芸術に練習せ
させ給ひし 薬王ハ芸術
のうき香調法華なとのにへ
めでたくれゆくりまゝ
母えてハめのとくらつけ
ようらえまつくせまする
ごのひしとどひよう流
ゑつしりとえ
あまたの門と浮りても
細 此句なきて下あり
うれしく我のとの薬れ
なまとつくしとと今
ちひ出てい母子もけよ
と出かうて 薬王の術
はめくくまれぬの家
ともと出寺の心之上の句
はでかくれんそれしと云

細 母の御ゆかしあらはれ
なつおじうの給ひをましせまていしうつけ
これてしと かつおじいわしそいとうねくまうすうひ
まて給ひハまのよごとおかこうましなにはすで
ぬらくとうくひ出てしとさきて出給みゆうまのこ
後身の母の薬をおそこし の母えいとめでたく出にやうかゆうひ海のれ
とめてくめのとれゆくりうよせりてしうべ
くいひしこ紙おりおしきことよいひし
どこの甘有さ海とまらよへおゆきの門に
三 後身の事 さうろてもうつひとかしの老とてそゆまし
花夷ハ つけさとめ紙むなおへるのめくのへんひとよ
ききへんかしけうつさまいれ忍ひとそめうさ
へとのうしまくひてしかねとしこさ給り

とまうりてもとくけるか
るゝべし
ゑんにさやうにうらんへとのそ
盃出寺の心よ雨中の日
らうりにかねをうらく
くえまりしらとくるむえ
うらあまうハのまらぐ
ら 引さもこか毎てへよ
見をかゆるさ積をもむ
つましきゆうりとさんへは
時ハこへなまうく人よよ
細 いく足つんく如くハ
下の時のさの家のそとさ
よまむへ 所 出寺れそし
ぬてつるへめらうへとしうり
もいれいへ見ら中毛の女
ゑみあいるさへとくし
やく王ノ知 細 河海よえハテ
例法華経曰若有人聞
是薬王菩薩本事品
能随喜讃善者是人
現世口中常出青蓮花
香身毛孔中常出牛
頭栴檀之香 正法念経

ちひろとらやしとさゆまぞしちひろうりにけるか
しゆるまうりつうまきさなし 盃薬のより出寺ひしく いとこえとる
とあうりよそへるうりかいへぐのとこと
うくめさまうまくまりくし時ぐしとさめり
人まふぴとゝよめぞ出寺曲 絶えたくとよ 三 法華経なと
えそくどくのもくれあうことあめうみもり
のうおうしさ紙やむごしたさることれ 佛の
の経無けるもとうりかりや庵くわるぎん
なこみもとうりわさそのまへるご例もんさんとし
二 経文よ出寺のこころ又此薬の中よ衆かあつまへのことし うやかうろくしことりのく君なれとこゆきのうの
癒のいらくくうまへくまへてい 然ハゆくくとし
経なうりとこそ此がにれ出寺さらすくれさうしけ

六修羅と戦ふ時牛頭
栴檀と林にぬれハ即
愈ゝ[illegible]牛頭の如く
あら山くさき出に栴檀
いまだうらへ　孟
あハ[illegible]　細中君なるより
孟中君へ蓋の洛母の
をきひてのあひられど
わすこれ[illegible]

かくさんくあ人ハまてるを
ちり[illegible]
ことの父こうて
こ深山の栖をとしえそく
二春ひきひてのこまそて
いうさめくとも今にあるか

よりよこるハもいえりし結られべきを
どいふもあり、ちくさまさの世こそはうしき
れる結ぶすれなりしくらぐめぐりしどきと
もじろまきてしきくねさり。あれハ無ひとつの
まることも。母のめりしの結。あひそめつう
とおらねきまでいろくしうりとこりの
結めるをとげよふでいまのあらさ。西ありど
りふハまつりつきくちをへうれど。の世を
そもまでもるどもひより結らんも物れし
ことよもひすして、ゐとまうしとのまへ
つうさめこまでも、人によあれつれしのくよ
てこそ、創の者きうりしんせうしまする

ん
あるひハの打しるとまてをも
孟熹いとこわ洛身の母下
人にあうりても居と交と
まりてまうさん人ハムつけ
孟母の教へんそてなりに
まして浴身ごとく
うまこみそぬこまの物をるの
よわや　孟教あつぬ身
もハ考へいうれうし合
こうハよぬうし相
河

此世のちのよやてふし記
三　女人の身よ嫉妬悪執
の為現世後生のさハり
とあるあるべし

ものへをそさつれ。げよの人の此者き酒げ
ひをこなりものまかりハものをとづく人の結ふど
そもそりくんの此あてりよおすれさえても
いうひきめべしものくわさき人ハムつけなり
めぐく結めれど。かずるすくぬこまよりの世の
のるひとやいとしでゆりまぎしと結らん今
をとうじくさも。母とふりのハうちをもろう
てこそ。此世のちの世すぐくふてりろ事を
子結るすれとあれへまでれべるんでおし
よりひきすれへ結らそれもてわくよみん
をうしも後ずしもてもをりのをきせまへ
ここアあれバいとはやうつりくなりていさ

いとゆかの車よとゝと
細 世とをむかへん夜なさ
北のかたいとゝかへんとをお
りしとらくくきへしとえ
師 落窪のうへとかへさ
さむにいさ継とあり
花いふのくん岩深の中よ
もとよハうれ世のうきてうろ
はやくこそうらん

細 葉の役とハふりちきのうハきりがくしと
やうしうさのんぶりうさようらとげて。ゆくさ紀
かまくさ敏ハきりがくさとく打ちはげさそてこ 孟 君が漢く
いつよ網もの給ひでなりぬ明めれば車 葵藤がいふ
ときり北方を遣へよ来之
どわそこそのきうそこしるじ。つとこゝら
めの役云を北方のまうにハこと
どゝえげよとびやうしうれば。がりうじげのかくよ 母の中君への親之
うて落窪を向けまうくとも
うげよしめのと労しさをそてるん。役そがしうく
させまそて。いらうの中みとこと。いけよとくもむ
まへめぐらし仰給ひずよちへらむことゝ。誹も
わしられさずすのずしとそとあへさせあへ
あどぶらあさきつくきそてこれにうこ 細 落窪之
をりとんがそく。あらりぬらちよしらめそれ
三 中君のおとうと二条殿のありと
まんくしらとあへど。いまをりしくかりしく

えくらうちそでまふ
幾白文の内裏より退
出しまふし。書陵が連の
車よ引あひまてとし
あのひ給ひ敏ふとく車る
とも例るそて 細 網代車
おゆとしるべし。若君を
かがゝうるくうあハいて
そやく出ゆくて 孟 觀玉
車のうつ前よ見ゆ奈内
の時も毛車までおろ
べしとえこ。倒るてと
ハそのびらく出あふんなろ
べしおどろ車うまへし
女車八葉ふすぐ靴毛車
ハすけの車のくすく㖨
まりあひてどうしとめられ
べらうよ内車よ給せそて
孟 白の内車と北方車
とゆあひされバ白文八廊
よりおりまふえ

ありようよ。きぶらしもさとあまれなもらんとあへ
まとがよふまつしくせりわて。車ひきあ 細 母少将のむらへの
ゑ海く
まり将のまうしあれば。めりよ。らなくらひ 少将の乞之 白ハ
てすりで給ハり家がつりすくまれて給若
まぼ。弟のびらさ敏みえぐれ車あみともも倒る
らぞてありしまとよ。さしあひてどうとく 少将の車をさし
めりそしられハらうよれ車しをそてあり給
細 白女をうち世まり 三 葉のうすがけんがよあうれ白の内ところめ給之
うぞのくる敏ぞくへさ給よいそごさいつる
そくせとくめさせ給ひやりまそて。そ来びしら 白文の父
とゝ人へ申は。まきされいづらうしと。はんるすく 白文の好色の依の人の誉さ
よ地がしまりもむくつげし。ひそら殿のま
らひまで
あまとへ
くぞてさを給とうしをとまりやうあうれ弟どとゝ 白文の依代之

どのとて　細 孝徳殿と
殿の字をもうしつゆといふ
つかう孟 此法師 よて殿と
いふべしと云に 此法師の
宗此いふべし

おもてさうじことを事よく
しく　抄 浮舟の母方のと
・まらんじて実親らの事
まみきらんと八浮舟の事を
いつ比とも

くる殿そひあくこそこときき
とゝ ふそて　細 田舎ひわそく
しきさとく　三 孟ぶ時八人
見志て御袖をつつみ袖て仍
かくしきを記とさ
らめくそろと不審しる
まりかし

うへそ　抄 中将の君の女の大
輔か君よりと孝徳の
おほ方とのあるとし

るきさ右いとそく
細 岸訓云まそぞ八法をさ
既写事云く
問云 こゝの如し こと
さ不 袖をかさき君へ
よろこび ふくよわきれ
ねは

めんかてさき　三 韻ふさき
ざハ書に人のかくれぬ詩
集の韻字をふくして
推まうるなり

属をもあそびをもろともにしたまふ
くもけよこてよそうのとれ猶やとうしくも　孟 少将の学すでそつし義も外ちかひきうくを
ふさごの御方のしともよゆへ中に　浮舟の母なさ
れもんぐるしきまでいどみきこえたまへ
しきさうじ紙おもくきてやつしる　浮舟の母と少将の是心
うへとはいつまじくかうらしくもひたり
ぬ家いりおそ分さう属とはふれやこてよ　孟 白実入方ひて中将に方なまそ
つよう給ふおうわさおしけよいそぐいそく
つくる殿そひるとこそことさうかあそ　細 少弟びかくしきとも
きつるなどある給也わりしてうひて
よくてさいかくつことめりてくめいぶ
らどかりくそてのそろ友ぶらりとぞ　孟 少 唐人中将の侍く

人はつとよいまゐりつゝもてあそびたまふ
くしけ殿の給ふはふかれ人のさくとう　常に親しく伝へ従ふ中将の御を
めうべさうしとのまつりよとうるい給ふそ
ねうさ右ててとしらそむき給もらう
まけよおりあくあかも志てむし御かのこ　細 白のこゝろさそ助けまとし
りりぎうまの人であやくこ気りおへはなん殿
まわくらりぬね右のきみいらしぐされちや　明石中宮とききさい
こらよきしあくそでどこうり給よおれはんち　三 夕霧の子息まて白実の分方六君の兄弟ども也
しけまそ右の地わ殿の君しからう
ちゐんふてさふらひつゝあそび給ふ
実こゝろまこまよこしきなをれだ女君たちは　孟 白の寝殿より中将の方へ渡りまふと
まろのかどろりそりへでもものくらや　細 やよう

五十月　細　なが月弥生月
とこまはすべし番ハ髪を
あらふまも月日を撰ぶ
べく画ぶし八十月は
あくるわざなり　三　九十月
ともいへりとぞ近代やそ
沐浴まで日どえらびしくまゝ
づ正五九月をいむ又十月ハ
かみな月とていむべし
其ハなしぬまくえの
お浮舟の君のまへハ
いかやうのかたなど

まことなどしてそれまへにはへりめしちかへき給
（白家の中君への詞之）
まうへのありして。おりありさまれゆふすゞの
ほどころもかへしつゝあれさらにくるしくてや
なかめんとぞおぼしてまへはげにおなじまねび
（細 大輔がむすめ）
あくまでもそ例はすぐすをもやすらう日ごろ
ものうちくさせあそて。すぎさはこの月え
（細点 なが月のきさらぎまでつき）
日りなし。九十月はいとぞかへとぞ。例うち
（三 くきくら）
あるをつかせし。さらひいとおしかがまり
ぞみも孫まつりきれば。そるさえまうれうれ
（若君のことは今年やめなど）
あるほどよ。家はくてずとありさまにて。ふし
（白く）
のかさまれいむしぬさるしのえしつゝとやま
（五 浮舟の侍従など）
あらのまされども。てさしのぞきはべな

よ新参の挿代まぐハかと
みかねてぞし
一尺ばかりひきさげて
抄 引避之引のけ也
からひとへ
三 几帳の帷かけ一重也
いまいりの口おしくも
あり 抄 白家の浮舟を
新参の女房と思ふ也
ことさらのかれ中のかせん
おい 三 垢ばとハせつき名也

かのおどろかさうじのかたへめよおはさこう
よりまへはさうじのあるさよ一尺ばかり
（しやく）
ひきさげて。屏風をそへたるそのへまよ。
木丁すまそへてそちらうとぶらひとへ
（河 藻）
とちうけて。あるまん女の花やかなるよじを
（お浮舟のことに）
なんじのやうものしくさかりさかりて。紬
ぐいさしいぞさら。屏風のひとおりくてけれ
よろよろ。なかもあしくそこあちなめらかいまく
（三 浮舟のことなど）
いりのくちおしうしぬなめりつゝも紀がりてこの
ひさしよりふさうじを。いとこころそくまへそし
あけぬて。やをらあゆとり給も人ながら。
ことさらのかれなりのつがをんざいの。いとあはれ

座かふるのもちかりの石
さかる かど
三 石さかさ引どハやかまへ
も意わるべし

屏風のつまかりのそこさ結
あまよ けふりて白糸ょ見え
付られたつゝてま浮舟
の一生の不幸人護よはる
まふらて身とけふりてに
かりまそ世の不幸な
君人かふうしんとするかな
もみかてわくなる姫を
出て天命けのがれがたき
そとせ世の人ょ志めさと
らしめるなるべし
三 ひかのさかじハひさまて
いかなるわとの塗よ
とひさまてまりく

志らぬくよさらさうぐれかるよ。座りくる
のまかりのいしうさ程ハて、かりしかれバえ
孟 浮舟のみうあまかし
しらくそひかしてちかむちぬ衣り。わくさ
うかさうじと。今ここらしとわけて屏風
孟 浮舟の白とハちかふらく
のつまかりのぞこさ結よ。衣ぬとハひ切りひもつけ
む。例しかるさよさるれるへまやわかんと
白糸のんこ
とそくおかさわぶりさかやさらい。いけども
かりしくう
きゆうよ例のはうろうちぞ結つぐこぬ
のすそとらへすそこゐるさのきつじ
掛 浮舟の三角之
かひさき
まそすて。屏風のえざ函よゐるあひぬ。わや忘
と忘くおみざとさしくして。こゑりかうさ
海いしかりしおかあざ紙りうせるかくしくしく

さらあへしょうかとほり
さゆらり 作 白糸のは
さ白くざさ抑のつゝに
まとく八屏風なとのゝさ
へうかとゝらし 結さ
三 白糸のかとゑびてと
かさ函へいでまきあるこく

こうつけゐるは忘まざさゐれ
ど
孟 うらつけあれと
とぬえよ申れなるゑま
こし詞よわくのあふき哭

孟 白の詞之
すて。らしんぞゐのりこそゆりしかれどの結よ
浮舟の心之
むくつけくえこらぬ。さかりのつくくかぬ
とほりざ函よりそりくしていとりてこうし
浮舟の之
のびすへれハ此うでなすしきぐのめうし結さこ
孟 白のりかとうくへりの人ハ業するとそかく哭
んなねよや。かりうぞしきけハひあとしも忘まさ
三 浮舟の
さるしよ。いしとそづうしくとんりさるすしめの
乳母之
と人げの例るくぬとすやしとゑりくすあさ
めのとの詞之
なかひやうふをなしおそてさうこれハいか
ふかことより待らんおやしきけざうても待ち
かれとさてあれど。そでくりまつさこしこよも
あかもでりくこうつけなかれ志りさるれど。
忘ぶ染めかりくハ此女ここゑれバなかりうやと

それとさうざうしんやとハ
おおよ君のりこそゆるし
それとうらひし 弘衆く

今まゝくせ給ふるんと
哭中君の御ゆとるの方よ
つきせのゝゝハ給ふせふぶ
るゝ
あ中君のつ及まおつきう
方の御おへいうりあそく
のらの給ふとえ出る
まゝ

くへのりしまへく
細 書よハ家え及こそ
とろきを只と深弁を
とおせよふして隆ふ一

の給ふよ。蔦とそめれど。それとさうざう
ん旧どハゆうさだしとぞ。おれくるしく
給よ。文めなりなりとおもひてつらよ。めのと
いとんうるくあされてみそうり。出かとるすか
らえとうらうそ。いまいうしせ給ふるんせ
人ぞいふなり。かまんとゝしぬうこのぞくらし
中ノ
蛇蒜
どもぞかろもとなる。するこハそへるれ
孟 白さくの深弁のうくへとかひ
たのうく 哭
うこよえれして。うらきこらかにて。一よあひ
細 若くしく 蒜とこく 孟 蒼ハ袋よ入きく
ぐりよそ。ひやうぶのうつろよいれこめ。さる
あぐよ。まぜうけるよりのあらくうえりを成
よ君なるらよりうく人のよ為しくまへ
だとそけうけらうのさうじひと成ぐり

あくとして 御中君の方に
女房とつる西深弁の妻に
たとよとりうし人と別人
なるべし くる。お司箋

どごら。人まそ
哭物そろしれと 孟 深弁
のゑのよのこと

ぞあけう成。太くさとそ。あいふがむとと弘ハ
のさかつき娘そしけうしゆうてらるまよ
まくたり。あおきうや。わざ出かとるのぶ
太とう
とまつくざりうり。こうくらしをとる
孟 他本くくとうし
よいそかなしう出りて。やまよ成どふまそそひ
孟 叩こ叢めすること
きあぐうよ。文もある成くらしとなう。給め
白文のこと
のとゆくいとくるしとおそ。あのつくを
ぞ。うやつまりよ。とぞさく人まそ。拙ゆのく侍ら
孟 あとのよう 太とにあのくの羽く
人ごとよいとあやしきことの侍るまえの人
まうのへるきし 細 ええくく
ゆうぎそてるんゑうこらき侍ろぞてるん侍らず
孟 太とく
そとそさぐりうよ。ぐらうきすぐさむれ
とこの。いとうけくそ。そひなつかしと。

劒のくわしくぬれさ海と
三 右近へふりやがて白
菊ぞもしろく

あるまじきことにまたれ
らく　三 中君へやさん
いいかくしへ〳〵このおそく
まれじ白菊は何ともれ
おかしきものさぬらぬ

いとをしゐてのいかにかり
まハ　お浮舟とたよの君
ちき母君づかへ〳〵まどの
心人をりひまハあるぞと
ありなし

右近うへまうくるそ
三 中君へ此悟所とく
この母もつるはわりくさて
三 浮舟の母こぞをらん
而と中君もらしくが
りそく

劒のくわしくぬれさ海とうひまりは言なり。
浮舟の承引わかまりなきこと
女の心わかるを給まじきことくどしそれなる
お右近を詞之
思ば。げまいとをらしきことしおを何ともあらず。
盃右近が中君へ言ひこなし
右ぞいかはまでしきとん。いかまられて申者
まことハ。恋のびてふそしさとめとしてまけ
どおさましくうきわよられたくおへ〳〵せて。
白菊の心を浮舟の母を挑かける
文いえとも給られおさあうしきはそわかしても
かりしき人をれずとかまが〳〵まかん右々をばい
ひつかそしらるといとをしるへての今ゑあり
かはあるざりとらろえゝらく挑わされ
浮舟の母へ
いとらひりくいひらしく給。わつゝさなげなり。
きしきたちてもりてきうかして。それいらひ

迷惑てをりく
白菊のたに
うちぬづかり挑りつるか。いとおしとれハ悟ありり
盃屋ゆるく
うえ 中君へうしく
てらしく給右さるへはまゐらくてそおりし
まぜ。いとおしくいひは挑り何をそらんとあ
細中君の詞也
申れど。ま一いのころくさはき海られの母も
いつまあえくまて。そしらくぬさ海まお給
れんとおそらんじろやそくとぬてひと
きつ梅をさと。いとかしく挑わをとじいらぐ出
えんぎふくふんでも。すらしつかやかまよろ
しきハことそて給すくおやしさ人への心らを
三 中君のさ母之
白
さればいかそくハ出なり。給られんとおさまりしに
太夫詞也
まりのもいとれ給えさぜ。ここ蓮寺あはれこ一ま
申給田みくおそひさうふまへのてハれいも

けん。ことぞくくも
孟 春きこれ公の時とも
剛れるハかどうの由断
しもあつかふとく
師 寝殿よあさひさ
ますひて女房のかすハ
家の主くわかり給
ふもあるとく

心みときありの 細 さい金
まいつり。其宮へよいふなり
あかもて 孟 白文の浮舟
の方よハ此えずかありふ
よ中宮のなるやこと若
らいられハ白のかいめらな
さわりとハ太后かつて。
尤宮の心ちきわとりふよ
かしじ我

かかる時はいとぞくもまうりのへてこれなげ 師さうらう
とけてやすきを給ぞくしきてきいかまいしく
ききしぞ。かめれとこそとよど のじかりあ
れ。いとしそひとくおてまりかすかひ
かなりをまりつべくこそちかうれしが の
ねとかうかしていとおしげりかもとに。思
よら人まうりて。大宮やこの御こゝろうれむ
ねるやまませ給ど。て今いふらじくとりく
かくまをあふうしやまむ。太后んうきおり
のはるやそうれ。ききてさきんとそしつおね
いぞやいまえくひちくもあへいとくど。かとう
まくおゆりなとひやりし のゝ給ふそくし

りるやかてうれへし
ひかりきとにめさきりをもな
りりきとに。めさきりを
トアリ
きらしふかうん人ハ我かさ
つきとさく 孟 白のふる
よあざくしくまませ
ハ我あさりをとえ人今の
こまんとこし

されかまうりさつ
あかう文の清へさ我 三そ
らごしと太后かつと白
のよわもとし

いハいかみじうおもしろし。とこのびてさく
めきうつと給。人ハいとしきくかくきこ人の
なごよてそあかれをきしふかうん人ハ。
我おかりとえんとめでかりとかが
もまうりて。こ彼のかよりをいはまそこ
しおきてけるよおもをはらごさき給
べききさ海よりもあくぬれそうきに。されかま
いりしき。例の我どうくちくとひやうをそと
の給をさすれバ宮のさうくひま。ぶうくの
ちげつる。ところんなよの御ろうとききてや。
いぞく給ひんこしのいでまうすはあしさ
まへ人めさとかうれめてよ。太后をうらあらく。

ゆかりそでまで　咲 淀舟
のおいしらの旁ちろくゝしひ
ここかへ文字よもそろ
でなしへんとく　三 白文
のことごとのやうにぬがす
ゐへ咲すまふやくまおさ
つきらく戸次なる人をも
よべ寄せて又やうどいたと
大くぜの間と
つぎつる人をもらきそて
咲としめ戸次つる人をと
新面よきそてひてゐる
あり

くくおかしまりそのそ
三 白文のかくおかりそ
おそしハ次よ ありしとき

このたび咲とおかしゆかりそでまでとへでもつぎつる
人をもよりきそて中務の文をもおいつる　細 白の兄君之盃 早来とかく
細 中文の本まゝと
本まいでいまる人まうつうらよ　お中文本へ本之
きいづるを給つと戸をいげよにくるまり
ゐやこ給おりくもおつどと　白のん之
のおがもちゝんこともちらしるすくなりて
いうじう限ちらぎらどさそいでまぬ　細 淀舟之
うつき着のさわしろらしてぶおきのと
しひうしてふしまつりめのとくらおおさ
あどちとくゞられさきまゐにくろ　おとの須と
つましうひんちりみりくおかりしゆり
そめそでさしみきつきこし給らじおれぬそ

ろしや　盃いうる白文しやしまも合の目ゆかりそ
らぬ住右給ハいとおらどさる
のさしくまれさん人よてそじ
あし大ゆがくられ給くあ人ぐ
らいてきてくまふすへてがま
いでしてづとくなりつれバ　見
くげもくさ女としゆがりて　盃白の乳母のまをいい
とくつまり世まてるとそるとへの　盃をしなくての人
ちそうと　おりしくもゆがりて　咲
いなふをいうじくいさりひま
のろへとえおうりひ給しそ　細 方近か侍之盃 ひとのか侍
がしそてさらざらうとの

ことそのさしくまれさらん
盃まその人まうつバまんど
とか右と兄まりきそぞ
うのまありていと見の
しの須く
さめのらう
也 盃降魔相へくし　細 降魔相（ガウマサウ）
まそく不動なる本ど乃
やうは忿怒の相とお
らうしきりのて
ふ降魔相も八相成乃
の内之

まぶひ～示　盃 淀舟ま～
つまてふ右れ方をおまそて
くおりくと考溪ちり
版立之

はゝびろみえぐゑし 細 母上
のうそよわかるすあり
孟少ゝの浮舟まどひ
て孫みしうろうを
孝深やかなろうれ
しく
まゐべて此かねの 云ぞ
細 此かねのうす所史記
のいさくひを出来ゐる
とりふく
さいまへしてくくもむひ
お浮舟の母は孝深父と
のいさくひのうしも此りそ
ど良白玄の母ぞろうさき
かをえしすをむふとて
浮舟の守し

はゝびるゝぐゑしとおゝくもゝきすぞぞ
学し給ひかきとくさへくしいとおかしうゐ
るゝをべてこれかねのふきぞいとあいせら
く覚え給ふこのはゝし侍しくずしうおもしうぐゝ
しらくやさしきこゝむつかしきうしゝれ
ゐりく侍らとるまづいらきまゝむてうち
まいまぞかりしまさへうきりのとゝをどうち
うげさついふ気ゐてでいまはこととりくも
むひめぐしされそでいえぐくゑうれ
くぢうしらぬめ給ふうかまそへてをいうよお
がちうんとむかよようびしされはうつあり
てゐるゝ給ひしうしとおゝりひへ

こゝをひろんをん
細 長谷寺の利生と云
星成八成穢不成穢とい
つりおうくうくえん利生成
就は浮舟へむかやうに
もおゝしざかゆく此汜
ともつゝへんゐて
こゝとやまげまいひうそう
お浮舟を慰めうる乳母
のうかし

なくゆがそでくゆかしせぬ人てうとしうさきる
うられしうくべかれどもその覚へしいらくくみきる
人はいとくちかしうれども、さうちすきやくめ
はゆゝ深きんしりはうれはいとやとゝしと
くもしまり給そん、なゆがしくはいきそ
きりともそ川をの飲意かりしませぬ。義
とふうくて給ふへんすしうぬ出身まよび
くもこうりてまぐく給へいく人のうくかる
づうき海よのゝゆりひ学ぶいしるどうくと
まゝりとそよぞりの心さいあかりきせ
ましいめんじゝうれはあがうとしへゝゝう
つれあくいやゝ給るんやしかくもやまとげり

うらをさき　細内裏へ来
王まつるは此方の所
門ぐはきあらそふ人々しの
門の口あり人々し　盃内
裏への道次第らくさ方
の西の門より出給ふ罪
よりとて浄丹のかさ
卯の乃あるふ所へ出も来る
御出羽錦様ありその
ました浄丹の人々をおそ
てぬ不払りかりしとるく
う馬　細　後の鞍を
ゆるし鞍うつりハ鞍の
うらへやらし　盃　行粧之

細白来参内あり
いひゆうり、ゑいけぞそ出給ふ内ちう
うしの門へ
きくこうやあんでうこのうとうらう出
白の三の浄丹の人々さしゆうく
多くばりの乃給はし名をさてまいしあて
よくきりするくさくて、らぐくあろある
浄人
ともすどくらまぞしめてをまざき給後まぐろ
よまぞうしく拙がせい何し馬をとひきさ
いくして、屋ねよさのう御人すよ人がくらし
細中君より浄丹の人々とまりせきて
てまり給ひ人いくあしくうみて〔？〕らんと
白君のもとをおくりてかへさ
てあしぞかかうく大家ろやくく給ふくして来
中君よりの所之
白君の内裏よりこうひハ退出あらうげきうし
王給あれバどもハ出給ひて御裏のまで
まみやからもろうや、ましくて拙さみ仰ら
盃浄丹は出あれとく
ねと、まうりのへ、うれしくめでし拙がき浙らん

くろうつてくそおかりとおん
御宴ゆりもあつさうりを
中君の御かりをとへこうしくし
あかうまろくけりひゆとらきん
二浄丹と菓へそせんと
中君の御かりをまよ白君の
と宮参てすあうくバ葉
のほあみつ入御もさんと
へ八は君のんて
こそふうくおちるとねる
とも　宴うきさうすとも
とかめらしく文鞍宝
曲りある御とろろ
まうわふへつをさとく白のら

細浄丹の局へ
くさくろしあくりうきりくらのいくらうし
うれうせ、ありしひてとめのときそ労く
又中君より
給いろうかれくらぞし。ありくろうちうく
又浄丹の若衆之
ひきくしまへバすよぐらしとと笑くかどこ
二人は中君へ老女之
ぐらとくろうしく傍とすましますへバかねあとめ
盃中君の人お内儀
まうきそてくぐうつうくとくそ拙がらそ
細中君より
らんとうふをとしで御からうりいいとあしいらく
細菓子跪
らあしくんぐらしきまざされなねのうら
うえとし
とくめさうさ海よの給めうしをいりるあ
細白の院とぞう
盃菓の口さき
くくしくおひあしくさむりくのをみぐり
ぐうしく拙くさすり人ハくまよくてえうるすく
ぬくしとるくるのいりひ、まさまっくるまさと

のあしらしねゆへに実に
浮人の身んちんきさるゆへ
この恋ハ　細葉の花といへ
いふハ小松にて下の
ちかね根のあとをとり
盃ちハ下ゆくみのわ
さかりいふでふぞい
よきまされけ
物ふるくさつる　細葉
の人まぬそおりせぬ
るくちしきさるすもく
盃白妙の雪の浮舟に
そひよりと僑にふち
咲
みへハうらをみれハ　二浮舟
のゆび爪を引れども勤め、
うし八中恋のみまそひる
ちかくさくやうりとし
またこそふれをし
盃　不ㇾ放ニ浮ー　仙浮抄流離

しやんぜおもんしやもがさむすりよみあり
しつべうしもおかうすめれば葉恋ハいはでうし
とぬりかんしばとうつしけよなふうちさと
あいちくやかしそひめうへのへゆめり鉢　浮舟をいふ
ばらむぞおもしざりつる人のくきうれどもふん
うちを見れどもえひちなるやうじゃら　盃浮舟のこと
そくなつうしまよ世中いるとうつくしりりし
げろうよのゝみ、銭身の手指いはりぬとお　三
ゆりなちもれどもく物ろれきめとも　浮舟のやうに八おもはせる
つぶりかろ身のさはちふれどもすりよけり
いとそげよめやもくさえりられ、今いしくて
このふくらうろそひまへる人の　細葉　盃葉のことをけしう

あらきはぞ一りきるひでん
三 中恋の髪をけねか
能がねども恋あり出
く

ふしもあらがるよ勢を
らん　お中恋の方へおそ
せばはうすありがたく
んとあとのなる

てもてもれるなく、さしるよ何ぶりもやひれ
どもうらんしゆれをいしゆかりれぐ　中恋の髪
あれぶにみゆしえけしやうれども、ゆきさる
まつるもうつしあらきはぞ一うきるのびうり
まそゆそもか、ゆそやりゆくかりしげるすり。
この恋ハ海しとまくちをあらくかんいり　浮舟之
されどめのといろうさつしくるしくもと　助之
みぶはよ勢がとらんと、しゆはりかゆく　盃浮舟よ何とよく中恋へ心お
あれとくしなりまへおをの恋らじよいごしのあり
さ海つじめありくり待らんとをめてそ
ぞのしきそくいてるさの浦さうじのりし　盃中恋のこと
いこそおそのあよ地そくくさえんといへべ。

まめやかなるしげは
みえさせ　おほ浮舟の実
なきを　とまでとしく
なりしとなれとく

あやまちもおかせぬ薫を
浮舟の実なりとも見れ
ど恥かしく思おもふさす
がかてそこなはれ
とく
いさゝかなくも世をそう
なる人こそあれいふそか
もし　世のあらさ事も
是がなる人こそ実なれ
るへきさ物をとえひ
なりしてさして若き
ともまづなれ浮舟は
世を知らぬねんなりい
うそらさやうるゆひえ
らしなふのまおある人を
ことりわりてしかり犯と

さらて知られば、いとあやまちおほく徳つかこしのみ
うらみ、身もあくかるゝのみそ、まめやかなるに
なりげなきさせまほしくかしくきに治
我は前ふさくなど、さらぬのしさと、さまへ
しそてなんおやまちもおかさぬ薫をいひ
とつくましげに物わかりしまで、ひさくこめられて
させまほしてそいさゝかなくも世としつきに
つゐ人こそあれいかなうてとかくあはれいて
知しくこなすかとて、ひさかうして
すゝ、我ふとあしきも人のたまふん
なつかしれどいつゝやういにしき
もてさるまへいつくしいでゝれてしげくの人

三　男女のあはれるさ浮舟
のもしぬゆへに気乳付
まるばかりとものまゝ
く恥しくそらこと

いとうらめしきよめ
らしき人倫しう
細白の心をとつく覚をと
はよつしぬをさえめかし犯
とは浮舟も下るゝなりこえ
おもほゆそてえそらおへさ
ものゝ文ど　浮舟の太政
なとこつもしてハうらを
けそて見へ、あうなと中
是のれせ人へかてかえり
られあうるなく

まひるいかくるとの、かくかめれるをとりて
くしきく、火のさまよそむしきあくるさ海、急
をとさとひるすくさをまうさ、けをとう、もさくし
をおそてよかうし、これは物わりつきるがいめさき海
しげるうことハおりすんりしいとくらぬを
ざるめづらし犯人がりしう志給れて、ぐる
とりくうりそろりぞおかまへまそて、え、そらおへ
給れてひだへさねくうりれろ、相給いとるうしく
しあそし、倒るうしもとつてまうしき前るとたな
きひるし給そこ、婚是のおそくをもてるまりに
しのちはもそしうあくいまくいつくどく、男
をらしめくしく、あくびるすくさんらしてまと

哀。あるんかふ人をなまさ多
り　三　以下を前段へ
つけて見る。夾前生段の
句法也

年ごろいとはるかなるのそ
むひ　故兄宮の故あふを
いつぞありしまゝ又八東
よあはりしあまそてもあ
る〳〵

ぐさまに。いとよくおもひよそへられ給ふに涙を　大君に似たる浮舟のさま也　句
されば。まづむかしして哀まさなん思ひ出　三　浮舟
人のかたちかな。むかしのけしきわづかにやう　細　大君の中君をおもひやらるゝ也
よはりしにはいとうらしくなんなどかう　にあはひ出来たる
らひまへど。いと抱つましくそまてひるひ　浮舟の義也　細　浮
しろらまいつくしうにしんとしりなくて
ばいとさやうなりのこ思ひ心えさせしよふなう　舟の詞也
こなり給ふえ。なまよことしにすくきむこう　孟　浮舟也
ちし給ひしあんとげりいとようびたりつる　孟　絵構也
まて。ゑなどもとり出させて。右近にこと　浮舟の義也
ばよませ給ふ。ゑに。むかひてもの恥ぢもえ
しあへ給はで。心にいれて見給へるほかげ。

おてさへくそれと
孟　貴アテ　さまり大君に似
させ給ふ　三　大君をと思
ふ程とよ所ぐしりと
中君のおく

こ姫君八つ々のれくさ
面り　孟　大君八八宮
に中君八母上に似たり
と皆いふとぞ　三　同義

られ給さしそく　三　大全
といふ似たるもうよ夫

さらにこゝとみゆる所なく。こまかにをかし　難あるなく
げなり。ひたひつき。まみのかをりたる心
地して。いとおほどかなるあてさは。たゞ　孟　中
それとのみおもひ出らるれば。ゑはことに目　君の浮舟を見まほしく
もとゞめ給はで。いと哀なる人のかた
ちかな。いかでかうしもありけるにかあ　八宮に浮舟ハ似たるべしと也　三　義
らむ。こ宮にいとようにたてまつりたるなめりかし。こ
姫君は宮の御かたざまに。我ははゝうへ
にゝたてまつりたるとこそは。ふる人ども　晄　浮舟の気
いふなりしか。げに似たる人はいみじきもの　浮舟の実妹なる似たるを知りて也
なりけりとおぼしくらぶるに。涙ぐみて見給
かれはかぎりなくあてにけだかき　孟　大君の事也

まかしく浮舟とおもひけりめ
といふこと

ゆゝしくきけりひさまま
一今度し物別る雲出
五十ら乞置の所為人世
人ゐ百不足あらじなど
し中君の御かたをと

と此ほかなせしれあり
まなみどおかしかるぞ
三 八宮の御むすめをもと
ゆゝしうわがみのゝし

なつかしうなつかしきやうにハなかなかまさりてなよ
くとしたる心ちしてながめておはす
孟 浮舟の事中君の心也
られハおぼさりてなのめなる
まねびくるをつくましう
おぼえ給ひけれど御らんじ
きこえいとゞ御かたへめしよせ
ゆへくたちけるひざまづきてつけさ
薫
らハ大将のゝ給りんみをさすよるさきあり
三 中君の心也
おぼしなどこのうちにもこゝろうきにおぼえ
給ふ物給ゝきこしめしておかげ
浮舟を中君の也
その給ひ給へるにうよふをまてこえのたと
おもとしころ物そをしれなき御ぬし
孟 浮舟所也 師 又宮ハ見なると也
給ひしうのとうれい給ひくゆかしく

上べの人たちの人
三 白の浮舟よちみづき
きこゆる事を言はる人と
いさゝかゆるされたるも
細 中君浮舟の事を念
じはなれたるとも白の
おんのうへりあるぞかひ
なからぬしと 孟同
師 中君の浮舟をいと
う表よ思ひとも白くに
のえやれまかりかくだ
めざましきことも見そ
うひらうかべしとく
あひてもあるめ 細 前よ
よしあるかたくことしも
給とおりしこし此上事を
どもかくて御めのまの
御えおもひくもあるぬ
心地こそそれ 孟文
ほかさひまつもことなる
るハなまさし此のしかり
師 白文のくらへまらり給
とて此ゑをもんかし

まだなりけりといとくるしうおぼしけれ
細 大夫がおぼすごとく
と思ひて。上べの人々にハいかるかり
つくろひ給ひていとくるしげなる御様を
じう御覧じもひたまふべきことかいひ
宮ハおぼしと
おもとびたるくせどさきをあらずや
細 宮のハ猶きこゆ也
道を引きかへて
それひさきへてもそぐろよからぬ
しきりてたまはれてぞいとひ
白也
てをおかぬやうなからうなどして
そうきららすさひ給しかいやうとも
よりやおんぞそしたくのりしうへの
細
おうくるし
うけのいと御ようたなりしことあり
かみはなし給はざりしをるなどうさくめ

とゞめしかるべしなとは八宮よおひて別をかしくうかゝとみのなそおひてとおぼえ
ぬとしふ句つゞけて云る也 三月哀
のさやかにさしみぬとや
えなひわさしあひても
かのと車にあひて 箋書陸
めゝうる車をとりまかる
なり
人もみしりぬさ句なり
おもふさふ人々をかまふ
なり
抄ふくとへあそて人を
孟 上臈も抄ふくとは
し給りのとくし 師抄ね
ささすハ上臈もなし下
臈とならぬるとて中君
えさもなひまはりぬを
小方の嫉妬みさんなるい
まくそつし
いらの給ふん 細
の扱いかくいらハ狐の 花鳥 きつね
性の影く狐ハ狐疑とて
物はつねハ疑ふ心のあり

細 まぎし侍りてのまふるもあるべしとえ 孟 みえつゝしまぞ
うそいとおしかる。めのと車にあひて、ひとら房
へいぬふのうさまくりくともえぞむかひつかれ 母の名
さはぞて人をみしりぬさ海よりひかふら
ん。さらしみをいかゞみるべうきうちもと 細中君て
ぢのうれみくくはおそて人をみるさ抄なり 孟 當人々 師 上臈のること
と。そのかしるすゝひよおかしくえてみえうり
てゝうゝさ気りぬ。えかゝりしもさてひでんえう 三 浮舟の母の二条院へまうくる 抄 白えかゝるゝ退出あるとて
ろやそくておやもくしゆかされげあるめを 孟る 細 母の詞と
まりせをぞれそうしろやそくかまのと
えなせるりし。いさらの給ふんやさけなむ

抄くぞのうしくにいらも疑ふのあり物くじうしろやそくハおもふんへきもくさくりさ
心のありとくいらのやうけるなといふも疑ふのあり物あるなり 行円哀 三 咲円
やうしぬかりのども
細 やうしぬ抄と八常陸守
がみのと 師 浮舟を
是ま親げなても 親疑し
きるすの侍れバ又母れ気り
ならとの名之母の是へこれぞ
常陸守ぞ根れバ是へ又気
てうしたふくミ根れ侍る之
まうげてそ 細 ていう
とうふ詞を從ゝ まうけ
とハいうらうさゝうりき
ふもそうり花いうらハ
人をそへてあやしくふ
ひてまうげなきて抄之又
云中君ぞよふをさえるや
うるなしこのすくを
まうげにぞ親りしきれと
中君れののふなり
えもうらいでききてしまぞ
三 白の浮舟よ近付給
てるをと母のえりひ出ね
し

ちのしけれバおもくぬものとしよにらすと 孟 中君詞之 師 母のおよふ抄き
うくしくれ侍ともいとさいふつり
の抄さるげさよハおしくざめるをしうろめ さげる人をとおぼしとみて浮舟のすをのおやて
さげよなしきえもしうれはまげつそこ
づくりされとそおもひおまるかんからつ 浮母ふ
しげたうはまみそごろもうちのそめく 細 母の人之 花 母君もさ
ゑづしくそ抄あなかいうよ抄がてかくんと くるすのあれたこ 細 母の詞と
ちへバえもうら出きてしぞうくてさふう れ気方のちあるゝの親々を海見まうとと
ひのそしとこうの〇りひのうかへんうて
ひとのうりさて侍しんあのやさそく〇もまでて
しきことよあんみあするとさすがよつる〇 くてのゝ浮舟のおりまき

おくさ山のかいはさきにも
細おくさ山里にすまゐせんと
の事也。世にすてられたる
人は不要なるとぞ。師説
また経げにこそかねがね不
あはれなるまじきあり
を山里に住せられんも
のしろしめされてもなく
こまかなるべし

そのころをとなん 細さや
うの方もみな心づかひ
せずしてよかりけると
かり孟白の時は浮の
君をとこそあるべきに
例のなるとも見ゆれ
むとこ
かきけるとや。やうやうになり
つまし 細浮舟を古事の
ためのいてはかなきとい
きこえるらんとそのかたは
たしかにしるし孟は浮

（てまきてき白文のよりそひていへり）しきてしよおほん侍りなんかし。おくさ山の
かいはさき母にすまん侍べきことにもしらち
なくもいとくおしくて。こつよはなつこと（細中君の詞）
か。うしろめたく物おしみへき。しそをうくて（三てまかせのとりまかせてて）
としく〳〵おぼひたすらさこてぞこそわ
こめなしらむぞぶらひて。ようしぬ人にもと。（細白文の詞）
時どもめし給めれど。その心をこれ人に
ちりさめれば。こころづかひして。らんなうか（三浮舟の心をあはれ）
りそめすらきて一じとおぼず。いりめとして（しくはなとと）
かり給ようとの給さら。よはらをはべつて（細母の詞と）
ありてもおひやしさを給しむぞうちける
いらうゆうしなくうしすぢはなよみかげ

母は故宮の御事と浮く
しげうへやるもの也
らし

ちはす家あまうけたりけ
つ… 抄書陵の素風家三
帝にあらとし葺の書
きやのさいかくてる一也

ても世のしき世侍らんぞ。そのかこなうぐでも
地けたる川まじきつみも侍らとなん。（細浮舟の母と中君の母いめいぬかたゝるをいへり）
とへどころよきのこさてえするみど。
どろりすらんぞおほしくおもておきそてうえ
物いひよ給ふを。物月ぞうなしぬこころよ（孟師かたかたといへるを）
てもぐして。又も来らを給へと申して。
いぞころふぐいとおしくおいなきこゆぎられて地が（浮舟也　中君の心）
きど。えらじめ給けど。おきこゆしうくこわか（中将の君の心）
なこどうかぢろきさきこえされば。地さしく
りのをこきてで。物ぬ。かやうのかたがへ所
とおもひて。ちひさき家まうけたりけり。三条（左に…集相なりけんと）
わたりに。ざればみたるが。まだつくりさし

三 善の道をおろそかにし
この時身ひとつ何やさき
お浮舟の身一つ何をさき
不孝こそとくに母の心を
こなかくちかりいくびさ
ふうまろぐしうくど
三 志みくいりかす八倍婚
みたし身を立てしてて
この浮舟うりいふしと
細 前こまの浮まうそな
きこよしといひくきち
まへんうくことそべき
あくりうれど浮舟の
為と母りひてむつびよ
主あれてみうくむつ
しきる出来あう足
ことをうかりとも
細人くしきさ所をそえ
うけ達九とくし 節三条

さり所なれば、ちかくしきこともつらひ、ひとせ
でるんこそくり、義これ浮舟ひとり何とどうろ（是より浮舟の母の心く）
何よりてるやこと事かうれいてるうかれ
うね世中は、おりふしまゝにいふ物よこしそもすり
それこ何かくつりかくひさこかりまみるめぐ
しうくびひらげあうかどさろくこにひひ
こわりてあつへしこれはゆりりいふら
しと思ひきてしあふりとむつびきすこ（孟 中思の不のふく）
世のよびんあきことも思ひさるがいらんへ
へるまじしおちさるしいやうかりとも（浮舟は母やうえかわせと）
うとへ中を思ふかを、は思のひて母れしとふ
をのかりしりとりしくもつりまりてん

きことともひつけらく
いふ羽とおちかさるしと
ハせんりこりろなま恵之
おやたこまして
孟 浮舟の許を母のえそ
ぞひつらぬうらて分あい
れるり
おずふどとんあきん
三 女りゆくうり母の
ねがひのきてのあつさ
くをふうり
しょかくろし、てらんを
三 緒こ継ろうそでかい
まんちんぐやしとと
年ころつくさうらに
孟母の浮舟をとりそめみ

といひをさそて、こずりしくいりうりろんしとうと
思いうちさきて世よあかんこともろを（浮舟のさ母くく）
げみうろ身と母りひくまるさ海いとあへ
れ為り、母やりきゅうしてあつうしくおりき
れば、つりうすて母り心ごとこれさんとかさひ
きうりきこいいくさきこともまつけても入りそ（白文のへおりせしことく）
あそくきくいからいれいそれんが、やまとうらぬ
かりそり、らうすくかもしいあくらぬ人への家海（細 母の性をいうり）（か我意あるか人とこ）
いふうらやうそくも思ひのまくまにてするうあ（孟 常法にあるが家まうくて来りまんがおもてとく）
つもりうのの家ふくもうくうへてはまへうくり
ぬべきれどしりかくうへくさうらんをいひとた
しと思ふくくあつりふま、年ごろりくこわり

ゑをうすれぬつよりやうに
つぶそくかへこゝりるさき
とろるり
うさこにんがそく　お淳弁
と母と袋別よあくんへ事
ぞーがひよぞふし
さうしくよあうねこゝを
ね曹子こゝ也師つかる
あどよあくへどりのるす
こ代乱もさうらいへには
みらうり
つひをこそ仍るもうしろ
めさうれく　書宗のるす
あどこいひ街捉しうとゝ
つゞしも恨んれとすくて
母の兄よあり　こゝれども
とゝろうり
すえるてよさ夜來しく
お淳弁の母の君謨と一つ
にまうりておねのうすを
いとるすりぬとあへ萬子徳之
みるのへあかのこのるすれうれ
ゑ　たるよし兆りか淳弁のるす

さしたおけられこるすくひそ、うらうこゝにまいこてゐ
母の淳弁よりの詞之
須そく。まりるの人とゐへつと。こて　かゝりごろうくあ
のまゆるうをぞり
ぢられてあやうげるすう京るあり。さうら仏志の人。
男心あれどこ
ざうしくよあう物どこもめしりそく流うひ
盃　妻宗之
まへ。どのるび人もへつとるすどいひをさうそて仍り
常陸守のかく二まよ母の異　母子
ゑ。いとうしろめくこゝれどうしこまりくうろ
お母の常
うくむすめとゝ
うくこゝらるしが。つとろるしまうれどもとうら
陸が恋へ伸之
みさそくる。おおねのあつひと。どうこゑ入るさ
常陸之
常のかねこ
りのよぞひそぞそて。りあ。でうよ　さ國あし
くいとるまずとゐんもら。ぬそうりいとんく。
盃お将れよ淳弁の男まるてくめ辛労をまるると母のんこ
このへよ。りうりまいされどとりしあるそう
しとゆうこるすく。そゆうくこのゝとのうれが流
名うにあれども

あれがおおね頼とつくく覚
ええしおねのるすとあうく
さつれざうらとく
りの三十のゆおはまへ事
るす　　　　細　白の流弟そ
此おねを兄りまへ事
まりりしるそくさて淳
弁の錫よとるへきの
んハ也さまをせうとく
まこう施よ　　作いつ重
をかみり　むしこなすうく
うきこ弁よあやさんと母
のもとてあとそりお
ねさむこよせぶりし
のこうりおわさハやとこう
とゝ之
うちめるて　　盃　夜まの
まをのく鞘を押さく
わ　つけてざねの裏よ
をらえ揺るどゝる同し
こさへしのりあひきさへ
三　常陸がむきの此方の
むそあうぶこゝうしこ
方販なり

らくこうろうくくこうれぞ。のうあ
白
のたまへまでいとくんげるのくこゝえしこにおお
くちひやうしてかんだ。まさこうし物。の覧う
おゆひ
づりましとたんじ。おりひしとはやみこみるうる
盃　かねの祈と母のりいまるへこくへ
家よそたいうぐこゝあるとやくるうらとうけさう
さ海こゝぬみとぞく。のどうらよあまへて
お将のへ
母のこ
ぶつくこゝるすこよりとうりて。りのゝうそれ
お将の施之
ぞく。まうこあやのすうりしげぬよ。いなや
二こうえ
梅の君こゝまさくへ
うるこのしうめるどしをこさてのうるうをを
さうてそ。しのくこよさんざいこうるとそ討そう
そろうるそてけきさうしるやうゝのかるのしとへ
いうづくうにどうあいとこうけたあうさん
とこゑむすめまりくこたうりよ。るりるのが

いとしうござりますにかくおもあるやうなれど我白菊をそかねを見るハ物をとこ
細 家来そ

ことふかきこと
かわいらしくかくれしきし秋萩
細 公

とおさ海をそそひかしうらぶえ乃さん
盃中表
の白とまりしやさすまかくりさうらいにそのるしびて おかねをしはさ海どもとの二ひつ
きハ口おかしの海どりやとここ程ぎまへなら
ござりまにおかねのこ物るどいひさまかれてござりまと
けうハいいとうしやうまゆかひるなくんおま
細 家来そて
ろげかもうし御親の衣をなりしハさうし
八別のおかねりく出だるて
かねのかりくをおかおりしをいふくとこま
細 白の方よてえしけのるどもりて師 菩薩家の萩栽子も出つら
然し衣の萩の衣ひしくまかりしらうくまてこま
こよそ
れいうぞさうしてひきげん切すで我さうし
あどのいとえんなうくしそ一日来りて
出治得とありしりばえおかくどたりまえ
川とじうまかしきしいやのりらしぬ白

あかられ 三 萩の袂もおあづさかしさとさうるのとつさささとふかまくそやかやくらせ 三 浮舟を遠変せうをといし
ん
そこし おもれくての しうくらく
ひしくちるすげなかさ今
盃へ乃太府まへ同ゆれハ
おかねのくるさきやうまハさすがよるさき秘さ事
をいまそしてやうとふ仏
と芸人あつく 細 浮舟にてそ
あめゆひし
さして御参せし物をそこあめまふと八段どさえいわうしまふらうつをいへり盃浮舟をと今そて
遠まり下主と云ひつれども
わうとまらをうしうりうそいくるり寄まうる下むふぞとよめうし
家来の 細 浮舟と故ハ父

まいまいけらき人さららまうきをさしうめしり
盃 母の、お絵をと為
だしてかれを寄ままぬうりいでやら
盃 おかねく
だとのかごとりんへじん人とをわかれしとて
細 白の方ま手てのまく
いぞこしハいとこまなりりにもるすまでと
白菊の方すて
おかね何やとひひしやうい人とう
いひおすうぞしつやられどいていう
るげなりさ海ハさするまてしねべいう
細 母の方より寄をよろえそやれり
がいかしてらううまま
菩薩の吉方寄こ
あわゆひしこてやきがら人を海よもぬまり
細 おかねのく
いるまりつやまうりの下むぶぞとあのまへて
くさしくそて
おね
家来のこ萩がもししましまをハつめ
二 ろとまうすそあしまし、ハぞいらりし

のほまと去りさしてぞふひろうまじきさいのごとく 孟 多欲かしらん多めてそあれで

「あ浮世のりきわしのこゝろさ言とを りくし——

一ゑの所へさし 細 母のかくへ
さて八八文の所までしりよ
母を実さうくらしく
つどいつぞ人とひとしく
お浮舟を八文の所まで
人のあろし。係りさささ
いそひとし母のそひあろ
うつくし
あのあり 細 わんきる
うとらかんくみをし
さろをとりふんく

つれなりがれむすをしと
一こそ 孟 甚をつれそり
グがてそさしぞさして浮
をかれるのじもしまさぐい

さてしきせあさつめんとそひさり。こゑ乃流 浮舟を何とぞとぞ
くしさくうあめりくしふまゝ。うとじいりく
人とひとしくしのそ。そひあり川かそら。あひみ
甚こ うたねどのくゆき海りくちぞ。こひしうお
りげまこちあり。把白文の事とぞみて おあろじうめて うしきとは
まししうど。白こ さや八ねりひそるれまて ころも
とまうくずあるつりてとしいうまつりなり
とそふよもねくしどの 三 甚の事 乗 ゑいさ年すりよろ
母がきそこゝろだちへのおりるが。しろつけ
みもいひうけ給いぞ。つれなしがれるかし
細 つくまりきこゑ 孟 とこそいうされじろ川ようけてえいぞく

わうさんへくゆうして 異 浮舟も
細 ひうきふめゝし
くわうをなぶやち給らん
とく母のらく
我独りよせんと 細 山かねの
ろかし若をまうかねまぜん
とそうしも口惜しとく
孟 かねをならるゝ後悔とく
もそやうくてやと
とうしてやうらんかし
てやまうれとのらく
こまりまうらん人 甚れと
ならまうらん人へきらさ舟
あらう今うすうこるのめる
らぶきまさこへあるべくれば
いそぐうて浮舟よんを
とかあらんとく
世の人のあうさ海 細 云案
とりつうへの系くあるを
多く 孟 世間の人の上を
こへあおていふ之佛なし
さばんもつくらもとと

あれば。いろいくさん人へくましてりくやゝひ出めのく
給らん。我独りもえんとうく。みつさん人をさやへを
んとそぐうしまへしもるなべりくれなどさ
浮舟の事のようなるうる どうこうようくたそさすめのゝをもれて イと ど
やくやと
てやりくてやとまろ川よりまうしんあろ
ちじこ続いかりひつくあまいとくるし。細 甚みてかしを幽谷しげつてとを
甚のわうき事をいふし やむごとなき君の御とけいけりそあすし。甚の見 こゝ甚
まゝ人は浮舟ら今めきき人とく 思ふまうらん人は海をうしろのめおうれ
いらうそうはこゝろをとぐめ給らん世
の人乃あうき海をこうくよそとうり海さり
ぞやしうあそたろうされよまてさびひてしうさ
らもらをあるべきりのたりそり。孟 菩薩づつみを わびこと

まだおさなきほどは人もわきまへ
まづべき也とく

さうぶのはゝふつさむ
もめ　二 葉の子を浮
舟の母乃亀角なまく
つまとひあひなし歯
代の女二交をえある
るし

さびのやどりハつれづ
三 浮舟の母こ三条
こゝろの人のこと

うきこゝろハ浮舟のやどりなれハうきたる
もとゞころよこのきみにかへるべきやハある。
かねどこの家乃うちにいるさきのうり
かくども家はこかくきしまうしれバ。いと
をとりをしらずよそのうちに代の
はうしづさむ。そめ絶えなうまつりん人の
家の内めうちよわき母のとし
はめうけしかば。いとゞもくるしくつ
まじるべきりの名とふも。もどろよく
ちをあくがれよそら。さびのやどりハつれぐ
細 三条の家之
あるまいぬ母の生れつきおもひ…八云
まで。庭の草もいぶきさうちまちよい
やしきあつまごゑしろりのどかりの
こいづくいかなくあめよろべき前栽のく
孟 人のされぬしく 四九
あきをしからあはれてくれくし

母君ぶ川やと　細やと
厨戸といふ説あり。まことに
雑用之ろ書にハやとゝろ
さびしさらく母君ぶろ
やとハ此母君方を早下
しつあれど今ハ左中将
よかりてみやびちて御今
みをとかくかう
すぞハ此母早下志なへ
どいかつく浮舟のさよ
つゐるきこあり母ま
母君めまそていひあへ
やはハへのよありくあん

であしくゝしそよ家のうちへのはありさ白く
三 浮舟のとゞ中将を出かり
細 白きなく
ひ出るまけうひゝちよ恋しうなる。あや
みぐるまうりし人のはけきひもうすぐ
よむぞらゝれくあまごくよりあけれん。いと
世くく表だちの結しるゝれるがうしら
しはうりぢもきさなかうきこうして。
世そうりうしを出ひ出しる。母君ぶ川や
といとあはれげなるめをとうそてそこを
細 浮舟の心くとすもてゆる不運しらく親に恋まへるともこえ
結どわりなるをぞこゝろぐうしうとあつひ
結めうよりひるあつかくあれるれむなこ
細 母の文の詞也
とおすゝれくいよつれぐよこゝろうね
ならし結ゝん。恋うし母ひろうまへとある家。

とくしおられはかやめき
うち又さなくせよるそ
ひさかたは　細　宴をと
一向は浮世のおと云ひ
変らぬ孟浪母の奇く
久かたの衣裳ときに一
向は世をそむけれぞらぬ
すみいば花はうち人々く
拾世の中にあくぬ雨ぞ
えたしぞ幸ふりにたら
くちなうくきん　浮
細　いろあら所
うき世には
ど秘かくもうさ字
をよくりてすきやう
もわくぶわがあいるは
りとよあり義あるう
さよすり　孟曰
無残くしさ事　細　た
りふ雨どありのまくに
まあらとなすまく数
とへくうう奇とよもず
きりきをよかるくや

細　浮世の色をりて仰母を並めてそる表く
あらともつれぐくいあおよかたやきらくてうまん
浮　ひさかたはうれしくまし世中にあら
ぬ雨と批まれまし久べ批まれげまいひさかたど　孟母のらく　ば迷
母のし　うろおくまわろくと弄るをさそてぞらまぞ
ば放蕩　つらぶすしやうまませてるをつとく　いそらで
くれで
浮母　うき世中はめくぬところをおしめそも
衣がさりとるあしまりれどをま残くし
きつと　ざとをいひつりてるんなとのべあ
業人　るみのたね最い逢いの秋ふくなりもりてあ
すらひみしとるれいはぞめくとは抽きし　細
もくれをすい表はのこ業て　浮くれはじ

つしとし　孟　奇ハ歯まるち
がまきさを母の号みずを
久のやうにあらのまくよめ
るをうをくしとハそう
らがちしきん最こるを
もいとられぐしらう
おそしの夏最をこぶ
ちて孝まあしりるの
きん最の孫よ又きん最
をうくしく作らべ
しとあこおうしく
むらいとうこそぎく
ひぞうさう
三　八文の役君のひし
附そなるすりしる之

こぐう川くりもちてつらきて孫よ　こぐう
らおりしまししらひさらう孫りぞり
つるよ山の紅葉もめぐろきゅうわかせこぶ
ちしきん最　孟此度也　こるをいひとちれぐくきつて
まみしくら肴いとこと　そぞきて　ひぎり
ぐらのまくらしすかるをおひ出つるよこ文
を立しうゆかしまそて　孟　放文のおりしきんちんを作り　さ雨りんてぐるもくら
おしきまそでゆがきるれいつるらりもるがめ
あらあとると雅
孫りとまさしはきろうひいひとうろとげよ　うぞそくの文めのおりしあうそ
ていまくろくさと　姫君達の乳くさるまて　女きんご雨やりよるど
一ろこるをうぶらしもとあぐろ屏風るよの　孟　侍坊　奥
あらくしさこるをいよのるぶうのそそうぶう

山ざとめきさうらぐくも
お思ハ此ちん殿の御を
が別ふしあふるすべし
いそうもていそう
細 古文の此時着眼せう
れいもぐし此段ハ了入
られて
とらふもて 花ぞ 孟 薫の
宇治の君まそ風景文部支
のいまきじるひひつくねて
思ひくる君ありて
さえをそてぬ 細 古文のする
るらり 師 うての御前そそう
人さのあちひ常をむひ
しはうれるまきにへ河の
ミしくそぞいかしへと[illegible]
程よ此話よ きり
あんハさいへさうえみてし
三 浮舟の白文にあるかん

のぐよらしう文はあるらせまへり。山ざとと心ん
ちゝらぐらしもをこしさくるよをききせまそ。（たゞこし）
いさうをしてとそいぐさ。いとさらしげよゆへて
しくさちうられさらやせにあの河とり
やすら思ふみ給てときとふもくられ花ぞ
（薫の詞之）さえをそてぬ志あるにありかなきさ人の色
うげとぐまとぐめざりきとん。河とのいひつ。
弁の尼君のさてに立しりまへれいひとり（弁ゐて）
ろすしとこなかよしてひそそよひそむ。（薫）
（のまゐ）げそまよろをめまにわまそ。まぐれのつきの紙
ひきあけそ拙語し給。来了しように入てゐ（弁之）
（孟 弁は拙語の次にあそし）よりいとしのつめぞ。よりの人ハさ[illegible]（細 薫の詞之浮舟のうわさ御人あへし）

[illegible]
お母中君へ母のおをわき
てかき紙ゆつそそて候
と此ねぞうすう此ぬ
て[illegible]て文もあう[illegible]
ニ人と[illegible]て浮舟とい
ざるふとあうしゆく[illegible]
とそろしちうきかぐあまし
うい 三 宇治が京へ迎て
ハ浮舟と宇治よをきたた
まと
とくバそんそそてん不
お浮舟のみう三条のるく

かしこくしとさみすゞよさゐく。ちく覚えてし
てこそ。とくづれおしつ。れちられむりわこ人をそ（孟方）
てまへとの給へ。ハ一日の母君の文係へこ。い（細 弁か詞之）
（まゐのまえ 師 母より乃文は弁がむすめ）こさいふとそ。言りしにようんあくがれ給ふ。
ひづろもあやしき小家ようへろ住の給（孟 三条の家之）
めうをいとむ心ぐるしく。あらしちろさ間じる（宇治のすまと母の心也）
らまりしが。そこよまうしてやかそうへこ式。
あうまさし山ささちよ。さるやまとくもえい（細 薫の詞之 師 あう[illegible]）
ひさぞあんと佛しとさてしも。人ゝてのうくお（孟 薫の紙をのるへ 孟 顯舊之 [illegible]）
岩をうひしに付そそ心もしくすみうらにかはりつそ[illegible]
くれなよりりのちぐうようとせよハおくれ（細 薫の[illegible]）
よるんとそ。例の御ぐとまつ。さらべそのん（細 薫の詞之）

さかりにほひぬと
三 此ふみの二条院へこ
あさこの御しるを　細　河海
ハ雲也上人のいと引　花鳥
も講せし僧正のかけと引
かにつかへまつりしかたものも
ものさめになりし後のためにハ
山にこもりの人も出るか
のあかしに向　空也上人念
仏の御名に……この異地から
こんと信あるにそ祈念せ
られしに愛宕の霊山岩山
月輪寺ハ補陀落山ニ同
し浄土にて魔界影向
聖宿執白の不あれハ彼
わたし比行をうしむそ
し御恵の岩屋にハ彼山に

やまとしところよかさうとこしめへいづ
らやましくしらるにも出給ふぬとのあへいはかをせ
こと給ひてんちかひてしとかやきゝし　今なら
はたれをとふ給ひてんことはわかうしてもよいた
えまうしぬとこそさいへるあはれめ世そしかもうく
をへいのきこゆへいしそめくめてこそ
ひさうざまにはちかさぶらひてはいでたちやつるこ
ほうしばらさきちかひを聞やがて人のためひらこ
こそ給ひてそうつうしめとの給へい
へいへもことにこそ給ひぬなとあつ
ともかくいそきまうでゝられとふらし
かくれとも

中にも金紀の行と弘通せし　花　柿本紀僧正真済ハ高尾の峯に入て十二年行け
るを清和の帝后宮のためにとて内侍をして綸旨して峯を出させ給へ　三
栗古事までありし山にこもりける聖を衆生のためにいださせ給ひ
今の世もかくこそあらんとおもふなる
世をすてん衆生を度せし弘誓の願之一也　三　人をこそハ衆生済度のため
例となる　細　薫ハくはしきをあはれのまことに

ともあるて、かゝる御車なかりけんそのたびの
さはらずものよきさま人ゆめおこがましくひ
かゝるすゝきも思ひしつのまへい
まづうれしくひとよ物がたりもさすらんと
ちくいめかつくしくしくうつしぬれ
すれどものづくしわづかにあるも人ぞ
かくいつくそ給ひなと思ひてもかうし給
そうねならんにはとくよりてさてもなとを
とさせまへるふりてもしかせくとく

ちかきわたりにそれ文を
孟かれの三条の宮より
渡弁の宮に近かれハかく
なり　岷同

いがたうめ 細 伊賀たうめ
いめくめくにおもくさう
公人とさん 祝の名としき
語物よみくらり 家の
名ハ媒とさし 媒の祖と
いかへきかひのめんとがうを
がうとし 伊河ニ 伊賀郡
女媒之祝よりきえてい
つり 專 今 俗ニ呼ニ老女一
為媒 漢語抄 略記云
花二大佐日記よあるらら
のうつうめうろ和物語よ
みかとしうかわるとの
祖をひろり 細 媒といふ
との語談ご有法で元は男
として女よ媒するやる
ま侍らんつまりさと
の儀とし
かの柏いひ 細 薫の性の方
始之は寒の発端よ此
くも山とふみんかりさ
かんきるかしとあるも

かたらひのやうにおもとくられ侍らんもいとうさ
うよいかたうめとや。つまりしくて名なんと
きこし由。細 薫の詞之 かえへやとろうべきことへの祖のひい
とうくそあのりのうれバなど侍りひくらの
ことのむともめとるんらくみかうるもとも
つれしてんとや。そのうじのゆいうとわら
くらしけなめりとのさまへくらくらひ
て。いともかしとおふゝしうすれへ出給さ
草のゆかりさ花らも。紅梅ふると出ー出まて。
宮よけらんとも世給。ひなうもそかり
めくされどしことまりそさしうさ海りて
いとくとうすれゆゑし給ゆぞそあめくらら

よハおも女ぬぐる男ろく
うれしくしくハ志まう
らうらりくぐの御やめさて
孟平人のよとおひきつる
やうよ内裏より女三宮
へ女三宮のうすを後之
宮へつ人よそへて
細 女二宮と有くうりお
まくし給べきようみ
まゐらつうりきさんと
宮づへ人とハそり
の給ひしさ 細 おうそて
斗との給ひし日此よを
より宮給へつうし給
つり
うらひ 孟 斗 飼 應神天
皇御時よりらうしまう
とさく行

よりくぐの御やすめさて。入道の宮の御もとよ文
えさへ。いとやむこゝろきこさハかさかりる
くさくして。まゐりてきすさかすこと。うし
づきゆのしまふ女づくよそへて。むつしさ
まさらしの心乃をひきらも。らうしりろう。
の給しうさつとめてむつまし。くおかやさぼ
らうのさふらひ給ひかりかさくぬ心もらひ
つてまうくつうとれさへのゆれどもを
の御中ひらめしおきくつけうしの給ぼれ
らむいづくのまつりもれバひとつくの
くらしうれど。らけそうじつくあるひ
てのかね。比山のきかしれとくろよつけてこと。

見る人のおのゝして
兵部卿の尼のぞしろ人ゝ
ござし
ゐらせのともに立しわ
人 三 宇治よ浮舟中
常陸のせし時薫の乃そ
ききおへし時のうく

細古今のうた
いにしへよりのあふこともおもひ出られてく
なかめくらしてすんさろゝさるゝ。いとつれゞゞく 二条の家之
よ人めもそろぬ所なれバうろうやうもとくひ
さいれてうくらんまいりきゝうとぞ志らせんへの 末 薫
とのろしていゝとしられバ。初瀬のともしたり 孟浮舟の三条の家へ之 ちうせ
あしけるん出きそおろうと。おやらうさ所とと 兵部卿 於浮舟のこと
おぼめらしあるもとよむらしごろうも志門
べきひとのきこれバきましくてしびりれ出
て ゆやしくえたる人のけおもりの人と出 浮舟の兵部卿宮のうちなるを
よむつまじきさるべし。表は人とされどもと 細兵部卿と
まうし牧よりハおもひむそうてぬなりゝな
けしきじ。世中りけりおもひのまへとそしらうめしよ

志もめのともめでうし
ときんとさ
三 浮舟も乳母も薫
を白気うそ又弁より
てめでうしとおもふ
まねゝらをくるれさよ
細宇治よりといふを
まつり孟薫の出立あり
て弁か方へ宇治より
役ありといふせられり

て。細白気し孟中将のつて よのあよぐよきりなきしぬと。このもろ藤 孟薫のうち
まぐく兵部卿をゆめ のおやしきまでの絡つきしりべとおうてまへお
うしてるんとゆの母。志ものとも。めでゝ母 孟浮も乳母もと 薫のうち
しとこまざさ申てしく人の古さ母るれバ
ちそれぬさ母よの絡らんも表なれど。
よつよろく母がしさゞろらんといふひも
よろしきぞよ母打もづ用ぞよ。ぶらりん
まられてきとて門出びやうよろくさく
みやまあらんと母まんで。弁おけさせられバ車 弁か方へおびして
とぞひさいかたる。おやしともふおよ おとこの心
志よさいめん絡つゝんとそ。このちろさここさ 弁とつゞき 孟薫
うのおづらのなみちりをとさせまうへれだ

細弁くし
さしぐらきよのまぎれに出給ふ。露もところせく
しげき風もいとひやゝかに吹いりて、いひしらず
かなしくおぼゆれど。細葉くとこれを思ふなるべく、かゝるほどに
なかなかにめもくれつゝ色こそれけしきひおもひしられ　浮舟のことの人への心也
ば、ゆゝしくいかゞあやしとこゝのまでおもひあへ
ぬほどなれば、心さわぎて、いかなるべきことに
かあらんといひあへらず。やすらひ給ふ。細月比の心の程なるもいひて
月比のおもひあまりしも。かのしるしをたてに
あらんといふを、のかうかうよみなども、さまこと　弁ないそくさせる也
なること。細思ひとは浮舟也。思ひはかなしげなりて、ぬるまでにいかに　めのと也
のところいかでしかりて、あかりかゝりましきら
んおぼしなかしやはおもひたまふ給へん。

細かりおきもうちきこゆれ
孟 業の出さしのよきを弁
がいひさなうをもとし

この人乃御車いとくこそ
のまいれて
業の車門内へ入ざり
てあくしなるべし
三 門内へ入べきなかりけり
入ぬとよめる人のいひて

細母の御方ようく
この御よそうかりすんと御ひでやかしめ給ふ。母の御
三条より迎へられて
こゝろしりげなるれども、いふかひなくさこまで　孟弁の句
孟母へやしろしそこ
うさへおもひんわりなきをなどちなやめし給ふらん
は、おほしとまりく御心とまて、ねとぞあ
やしきまでに心のどやかならぬ折々
もろ思ひまれば、こと人のゆめあまりて行
くしきことも思ひて、のびかにおもひやうなれど、
まいとくらし。御方への御やうしき言　細家之孟家の辰巳也中納言家也
きこゆ。東もしらさく。やうのしにこの
ことしられいとおもし、この人の御車いる　夜の人の句
へくいひとつれてこゝろざしてもかゝらん
のこともへ、なにはるそもあれるどいひあ

このゝ浮舟 細 まうらうすく
も浮舟の母かこの様かさ
さゝの浮舟は家を
わらはくよ 孟 かうし
くをとふらう母かうし
母のまうるまこといゝんと
めく
さしひかる 細 浮くあれ
ども東山里びらう
まとそらやうのこる
まへし 弄 上﨟しう
ぬ雨のさ母く
さしもむつ 細 人々くまるさ
せあらいりしいぶらう今も
おうらくされさらぬ
きぬといる偶楽
のらとあるゝおつまや
のまやのあまらの母そ
死されさらわれぬこの
ここびいらせ偶る系
孟 行ると久しくおうせ
やとうころあくまくさら
あへいぬらのへぶそわっ
りしく

色ろもしくさくこゝすくねらうし（薫の心 孟 おそろしと思ふ也）
給ふのくまうるよ家もおほくにあど。
にぞさひてきびしうそのこくつくゝ
よなまつり
薫 さしむかひてやさしげさおつまやれ
あまうり給ひどある母そこうれどうらむ（薫の他の）
らひきつるをひほいとうこまはかりまでお（を見て）
つまのさく人もゆかしうさぬべしとぞ母（おとゞの心るかい）
うさ母よきをしのかれんなるおぼれ
だしるこのひさしよおかゝりしひきつてむひ
薫をていれさせらやさくも對面し給ふぬ（箋 浮舟の薫をさだまりてと）
とられりとしありりやはりさしとかあり（浮舟と薫の心のつくゝ）

ゆきのさくく 細 やりかのへ
どそとのらへ 弄 花 箋
の上へ 孟 番匠の総称かう
孟 いらすらく 八物ハ物いれ
箋 浮さくらつそこま
ちの人々さのねかひ
細 みえ家の形見よおぼく
いのうたまださこらしため
てありぬ ゞんゝくの程
ころ細やじさをとめるよ
まれたくろくひまかき
とまうおかし 弄
おどあみゞうゆあうく
まるま 秋の夜あれども
ふ人々うのらをいうへそ
ふうまうよとんそり

さしていふうあけされはひのくゝともか（薫詞）
うしめしきつぶそうれかうりのれとゝいゝやか
ざるすゝくぞしうれゝまうし給
れんいりすぬこの人かさのみかひもの給ひぞ
うざめしなきさりのえるぞ母うりそ（宇治にて浮舟とりかの乃こそさきて又あひしき）
まぞそろよ急しくてしふ人くそうやあり
人おやあさまうくぞむひさうゆらとさう（抄 浮舟ある人薫の心）
うらひまづさゞ人の母いとうらさける
めやどさきされへくとをとりもを浮いとを
めがしかうゝ給ひどりあうあけめらうらす
なまゐるあそいゝるぞ（抄 大弐近人小家の事）めがりらうさ事。
めがひ いりまとゝきらり（孟 大弐は物うき人の事のたぐひそさへ）

どうよのくらおう 細 在の
くさりてあどよてえる
いうすのあるるうべし
孟らりらの字でうれ
染の袖とえ縫しよも
えらしるうへし 暁
うりさの字つる 細 縫く
あり呉蓮世の露り
ねららなと不用 花あれ
さら雨よ一露もうとよ
わざの中るるとのえん
えらにさびへ縫らまぢ
きうりや 巽孟日
入てみてあぢみすり 細 秋
縁せし人あどし明ね
れぢ入てやをむなり
お衣縫しより内へ入まて八
あるべうしらぢ

三 把ぐろ人に
なぬあがりとして升もれてめまだきぞ中ぢ
まらやらの網あげよされバよりのいうこれ
孟思ぐしくおそろさし
うりものくどよのやうおうぞうしとこく縫
をうらりぎのまろ心よおすしひ縫わね
らうらよかりしとまなり扇ぬ人をいわけ
て出ろとらす。なまのくいりてみてあどもそ
葉のく
る紙きくめて人めて車つま戸よまとさせ
三 洛母と車よのをうく
縫いきいさをそのをまいされもくおやし
細 嫁要すハ九月に
うあへなさことど忘さくさぞ九月みとあ
つまそうどんち来まぞやいうふみつうしをそ
とるげしぢ。わま衣うとりとくわしく忠
升伯
のかなりうしらぢしもるれぢおのうしう揚が

おそしそせらおく
何節分九月節之話
手伝之ころく

衣のくへふうしめきん
中表の中縫らく。弁花の
ありきおぢよきそ。ま
いえこしとらぢ忠ひ
しるりんとし 飛

口志え方うくてい 示
吉治よ舞の前まで水貫志
まくいくまりなうらん追
人ひとりや待ろき
暁掛りてまた一人ことま
れのともまうりやしと
うりうの宮みて

まろやうあしんぢうろめるろそあらひ縫そな
孟 いまくくまいよりうへね
が月ハおろそをらぶどくうてしうとこ忠
升う葉ヘア向く
あぐらむかふハ十三日おうりうりおまた衣こ
じぢハえ条らしぢ衣のくへさうしめさんこ
ともめろよあのひてもりくり仰らんもい
葉のくへし 細 中まハ
とうそてちんとさてあれども中まさこの
へろやくきりたまぢうこく
ことさらせなまくんも。うろうくしくお
葉の向く中衣まハ追てもしらうアまへよく
おでしすそしてそれハ後みとつてよりア縫てん。
うしこよありべおうてハぢうろぢたまき一前そを
ともあそののみへひとりや待へさそしのま
浮舟のこと
孟 舟とくし 暁
まんさこの衣よそひさぢうしのりね
めかしとわま衣のことなりしいうへなど

うしなど　ひきかふべき
三 遠路を牛をとりかへ
るべき心まうけし　花 法性寺(ほうしやうじ)
ハ貞信公建立しまうり
寺也座主ハ貞信公の
師檀なりければ法性房
の名をとりて法性寺
といへるとぞ
わかき人ハほのかに見て
侍従などをめでゝ
すゞろにこひたてまつるは　三 車の
うちまでいらでハおもはるゝど
らちの物もおぼえず車の
なかに引へだてゝ
細 若き人ハ男女同車の時
くるまにのりて浮舟とある
やうは同車之車の内に
物語ハ此同車也　説一様云
男女同車の時或ハおそれ
かなの時ハ几帳をとよう
にうちハ車の中に几帳の
帷(かたびら)をかけなどして
ハ細長(ほそなが)をかけつゝきも云々

花のさしいづる　孟 この時
朝日かげなとね
さし入るさま也
あらはなる　花
おぼつかな　師 侍従がえ
尼の事を忌はしく思ふゆへ
あやしと思ふを　仁云
で尼人のなくひそそを
くちおしき方に思ひなす
なるべし
山ふかく入まゝに　三 宇治の
里近付かれに大君の事を

をとられて、いとあやしき心ちしてゐたり。
ちかき程にやと思へば、宇治へおはするなりけり。（孟 近き所へ行にやと思へハ宇治へ也）
うしなどひきかふべき心まうけしたまへ
りけり。河原すぎ、ほうしやうじのわたりおはし
ますに、夜はあけはてぬ。わかき人はいとほのか
に見たてまつりて、めできこえて、すゞろにこひたてま（細 侍従之事 供奉せし女之）
つるに、世中のつゝましさもおぼえず。
君ぞいとあさましきにものもおぼえで、うつ（三 浮舟之）
ぶしふしたるを、石たかきわたりはくる
しきものをとて、いだきたまへり。羅の（孟 浮舟をさし）
細長を車の中に引へだてたれば、花
やかにさし出たる朝日かげに、尼君は（大君）
いとはしたなくおぼゆるにつけて、故姫君の（三 車の中へ朝日さし入て尼が面のあらはなる也）
御ともにこそ、かやうにても見たてまつりつべかり
しか、ありふればおもひかけぬことをも見るかな
とかなしうおぼえて、つゝむとすれどうち
ひそみつゝなくを、侍従はいとにくゝ、ものゝ（孟 弁が尼をさして忌はしく思ふ）
はじめにかたちことにてのりそひたるをだに思（侍従が思ふ）
ふに、なぞかくいやめなると、にくゝをこ
にもおもふ。老たる者は、すゞろになみだもろ（地）
にあるものぞと、おろそかにうちおもふなり
けり。君も、見る人はにくからねど、空の（細 若き人と見る人ハ浮舟也）
けしきにつけても、こしかたのこひしさまさ（孟 大君の時宇治へつれて行し事を思出給ふ也）
りて、山ふかく入まゝに、きりたちわたる（師 同じ）

旬刈り出て山の雪消ゆるく
るらく
袖のかざすわありし物なを
しに紅の花ぞの香りて
車よりけしたゞかく
払ひしけ 細 色なきしらひ
らしかくぶらき直衣師か
紋など付らぬ八葉車の人
のあはれさらをもえ付あ
一つあらべし
うちんえしと 細 花染のか
まうんとく 師 浮舟と大
君のことゝもなうよつ
けてゆしく
らふもあひとて
細 今ハ云出しのわぞとこ
りのりよしく 暁 此物ハ
ことひときべきとんら
多くへだしく

くらし給ふらあてしらりぬまへる。袖のか
さなりあかしなずやうるよ出きられるか川 孟 まか
ぎりよぬれてわぞのられすねかゝゝあ
直衣の花のいろゝ服のきまりもひさつし 暁
とし乃花乃。おどろくしうらくらう
とかくしけのさうきにまよひけてく八
きつれまふ

三

こゝぞとこゝろよわりてもあさ露れ
そこれをきかずくねて袖ぬれどもふるを
あくまど。ひとりこぢらすとさて。いとく
あかうひらく花ぶさの袖をとるさぬらく
細 物語 もち我まうさ人あやまらくらうしさよう
師 世話よるゝびのゆる乱にかるゝゝ
なんゆくとらよ。いとむつつし

いとのぶらしとこゝろひ
て 細 弁の奥をとれを
ゆうさ八薫もさらすくを
浮舟のいづとかんとゝ
ひて何をうけまつる
あをこのよし此ゝのさら
せ 細 抱あられなさ後
いこしき母子浮舟り
いふまつし
いとおもられさりや
浮舟のころふかくての
こあうとのまし
いとゆうこめひら抱く
おふ君ハ大やうなれどと
実なる所あり。浮舟ハ大や
くなくおもし実なうさえ

くらうてらん。出びかつげなうくれとくいかゝ 孟 薫也
とふくあすて。縦も出びやうよくらうくまて
薫の浮舟のことをおもひやりまゐらく
さきぞよいつぐ出うてんとひてあかうれぞ。
細 薫浮舟よひとさせまゐらく
あどこのよしこゝのこゝろをゆきくうみすび
さきあるとはよふまくそこいつとるす羽衣る
ありれずらしあさ一すぢりてこの山のたもと
まくいとむりまいりやし。たふかくちさがら
浮舟の事也
まえだ。おりしさ 細 扇也 給よさうくしそ つゝまのし
げよそつぶしころまとるど 細 大君の事よりいつしかとくも出
らうれどおいつらよあまり出わどらさ 孟 …師 此うち…
つけ同素まうでしとぞ
さらぞころりとなるゝあら。いといつくらめ 細 …
の事也
いつうの抱うしよまういのあさくにいりの給

ねのうさ衣よ　細　哥ゑ
むあしき衣よみちゆく
しありひやれとも彩方
のなくさ　彩古伸彩方
ありさうすしきふかり
草前の心あり
かりくハ　細　下車なり
浮舟もらしやをとを
あかへきの心まうくひ
をしうかゞり　謂氣等
あ大君のなさまやうま
いそての玉ふらんといひ
ある翻よかハ幸うり来
これもあるを

のちるきえ　細　礼しそハ名
それども庵をぐさを
えびりうろ
はさしそあつさ　細　薫の
ん宿ハうりあるなな
れだくらうしくお家
わかとさ後流浮舟を

しるすり

しハやく花もりとなるさうれしくはべるむかし
さ帝まもうちぬべうめりおほつかなし衰
なきむやみどりてうちしんじられはべりて
うれしうよりどひありくものゝさとおもう
すくみてそひつゞけまてあゆりていとゞらうん
あらひてうちさりまつり女いつらばかりにしたる
語りんことおもどいひとすげうしけれどもえ
んなりさ御よろこびおりく衰よらうし
ひまみよいみすぐさあそびありぬおもま君ハこ
なまかしさしよありてらくまぎれそよす
おとゞけしめしおぼすさまるみことあるら
ぬ後のういとそのあらうけれしき給へ

庵ハ志けりりつれと
細此かとの小家の同様
しるれども孟庵の
る八草本の陰をとて
心若しりしを此宿治
の庵の行ハ彦くてよ
こそ浮舟の此家の小家
の庵の同うるぐ
よろそのべきて

家よ御ふさつきあふ
弄薫の母女三宮家
女三宮をくの文弘の
かたの又物忌なと此の
よこくに遅夜わるべき
るすども　とのひつるへ
をさ命く

さうすり例のへぐはてけりしうまゐそ新
つまありまうどんなのれどうへおまえ尼乃
しきうり来り宿ハなけりうれどこの君
様ハいとれんくし河の君しうと山乃
いるへりそなやしろつくらうさ御をといづ
して目どろのいふをさなすくさぬうら
それどいうよりそならぬ語もんとふうよっと
うさしあやしうゆかり殿も家をたいかを
くまゐおしぎうりあそぬ僧とけの流ぐ
つきおしこうまんとをそうふるわしさ同
あうされどうそさりの優そころとて
らのるやかしさよ猫つくあり行ゑとせひ

よくとゞめひてあらそねさ
れど　三浮舟の母乃源分
と衣どもあまたあつらへさせね
されども、今めかしきを
ありけるとも

まへ出てなんとふかきこゝろをつくしたる給
へさふどもゝ（盃女三之）らしき姫宮の御ためにも御のこし給ふ
ちかしけるも（薫の心也）はじめより此君を懐今するかたしく
いりおもひしたるも（浮舟のおかへを見る之）らうたげなれどもりそめ
そんくもあらで（浮舟の心也）なまめかしき女の（薫の心　浮舟の事也）ほかさまにらなく
なにぞよろしくとおもひくだしこれなれど
そうしぬ中ぞかしとも（細）うちとけつゝもぞ
そ（細大意之）我がのいとなかくなるをしれをあやう
あてなる底めかしきまし（三浮舟の親之大意ハさかどなかりし）のころおもほされ
しうそのすそれ（細　女二宮之）かゝしげさあやしたる
まゐあてなるかへのほどのやうしくめでさ
きみもとうかりふうきゆへ給ひかけ

このたいとのいよりそまうしてあつとおほしへ
ん、さてまへくしげかくゝの（細　女三宮の御かた也）まよひたまを
てんとなきぞなんかるべしとさりとて
れもあらつゝそはかたへまめならは
ん、かいとなれへしかりとよくしても（此守源氏浮舟を見とまへと）
しとかりこそへすぬさようくくしうべくわ
いれよ物をしまへでなをうらぬへくつるひ
らをし給こゝの（盃八宮の御事也）ゆくこゝとの給いぞむつ
し物侍おかしきうこまやかにはいひとまれ
まへど、さいひとつましげしそおろさきちは
ならぬ給（浮舟の父也）つくしなく御后を、（薫也）おやまは
つそてもなくひかりしたてさへいけりのゆう

このたいとのいよりそまうし
て　御浮舟の御ことなりと薫
の心をさへ
これを見むいゝつくしげうくまへく
お薫まはしつくれ女房な
ど八浮舟女三宮へさかり
ゆへもりしおまかし
くみ御女三宮まよし
らふ女房のつらまし
めあし

わかれしかたきはいとよし
さしつらぬへらん　細女
つとまし御ありさま御へを

しへつゝもこゝろえしとく
孟そゝのかしのよしを
しへてもおきたりけん
御手びてたらでし
くへはうろしたえぐ
うらしおふなうなくまし
抄此浮舟をしとまつるが
大君の形代にておはしつゝ
とくし
こゝはありけるご　三　琴（キン）
箏（サウノコト）りぐくかの宇治
の御有さまへし
文の法三人のねせばかくし
らいおそ　抄八宮琴せ給
とさんへしくくハあり
て侍りけるかと
昔これもく　細浮舟

へつゝもこそん。おやまびさらざれぐ
つけても、あはれなる事ども。いかで
ましくこそ（助字也）くちをしかりける（何不要不用）
とらひける我しもこゝにありける琴（琴）
のことめし出て。かゝることはた。ましてえ
（浮舟の　えひきまうじとなく）せじかしと。くちをしければ。ひとりしら
べて。（八宮へ）宮うせ給ひて後。こゝにてかゝる物に
いとひさしう（まく）手ふれざりつかしと。めづらしく
我ながらおぼえて。いとなつかしくまさぐり
つゝながめ給ふに。月さし出ぬ。宮の御琴
のねの。おどろおどろしくはあらで。いとを
かしくあはれにひき給ひしはやとおぼし出て。昔

大君の事を思ひ出給ふなるべし
うらしとおぼ　孟八宮も大
君もいましかばかくのおほ八
せ給ひ所なる浮舟のおぼひ
出なきくるしく
。その人ならば　抄葉の
身なりにさへ八宮ともを
りしくおりし
いとらうたくして
御浮舟と八宮の殿上人給
こがりしおぼれづく浮
舟の心也
まそ宮のおすは八宮なる
くぞとしへ
おほうらもりとおほさは一
いとうれしそへつゝも只
んとあれバ　まして琴ハ今
どうぞくおぼしんとく
哀すらうつまのしと　細和琴う
身のあつまるつとおもひ
さらぬへかく　孟あり

たれも〳〵おはせし世に。こゝに
出給へらましかば。いますこしあはれはまさりな（此所を哀しと浮舟の身の上に）
まし。みこの御ありさまは。よその人だに（孟何とぞ宮の…）
あはれにこひしくこそ思ひ出られ給へ。など（侍従）
てさる所には。年比へ給ひしぞとのたまへば
いとはづかしくて。（孟浮舟の体也）白き扇をまさぐり
つゝそひふしたるかたはらめ。いとくまなう白う（抄髪のこぼれかゝる）
ろうて。なまめいたるひたひがみのひまなど
いとよく思ひいでられて。あはれなり。（孟大君を云）まいて
かやうのこともつきなからずおしへなさば（琴ハまうひきならひ…）
やとおぼして。これはすこしほのかにもならい給ひし
や。あはれ我つまといふことは。さりとも

ま琴とあづまのこと
はまうせし、ヘ宮書と
かくはしくらく絃
あるり
やまとうたにて　細 和琴を
れたくよさき其なく
大和国にて和の手く
師大和と和ふこうのとハ
和のうち二おして琴
あそしは琴がつうあると
あり和琴にやまとく
の様あれかあり
楚王のさいの人 細 班
女国中秋扇色楚王
妻王、飛琴声、白き
扇あいしらんとひり
てうらひあつく
この頃ことのたひく 細 あ
づまるれなるり 儀書
膝てあらくたくな
ら　よう女房どもら
書ハ詩の心のしろしう
りぬとがきにてめでさ
くりと

てあそし給はんあはれくひ給ぞのやまとこ
とばらはつゞきなるしひはそれぞあし
てこれのとりかいてこまんとられたり
とはえしもてにてそてえあり
をこえんことを出かそて今らんう
きへなれめよに出かきぬるらんしき琴はを
しやりて楚王の琴のこへれるれはんの
こゑとしんしまるもの中の紙のまね
すくりよりしひていとめそふくちや
あうと物旅も中みそうなさるはあふ
のおともんとこへとこのやのいみしへを
らんじ給へらめでたるそどられたり

まうハあつさのいろもなとさきうづき
えしより班女が秋の扇ハ残に捨られなるなと
てあとおつとのさめてなるなく 師班女ハ漢の成帝の宮女なり、寵愛せられし
が後に寵をとられたるゆを白扇の身によそへて秋風に捨られたるにたと
へて詩つくりしなり、もろこしハ其注せり
ここにそえあれ
細 この比句をとらひ
女して後悔あるの浮弁
　　(能ニ比ョウ)
さるかまく〜かしき
あらその一なり
あさらゝにしらくな
あてての下に書き
紙に寿尾が私をき
歌く花人にたが筆か
はゝきこよるべし
そぶりのさとき 孟 弁の
ことより私ありひこさ
とえんとされへる細
をとるくにさうとく
師政依にて私にめを
とめきへるて細よん
のうろやうよて面
えきらめれとしるり
やうりは細大意よみとくへ

かうしことてそあれあやしくもいひつ
うれしからだ尾花のくさはらさりのま
いれりたきこのみさるに紅葉つくさめて移り
あきてゆんなりくにとりかすそて石さこう
かそよよくなくまこう紙に夜なるとこ月
よみてさてれがめどくめ給へ移よそくりの
いそぎふそえてけり
　　弁
やどりまいは色うつりかわる給かれと若紫が
えてもかの月くるとわかめしくさきこう

薫のかく浮舟のみを細くみ薫のをのを見るを表つと移りとえ
とぢはりくとも表のもわかされて

薫
里の名もむかしながらに見し人のおもかはりせるねやの月かげ
孟くて知の事をいひくさ
これをとハなくてのまゝ思ひつゞけるを
あかと也し
細例の似合の詞とし

なげきたへ〳〵薫のとまりゐへだ昔の人の出来ぬるとく孟子か〳〵の其よ當来してかひおぞハこのかしのてあかしるずをかひ出そよめりうまし師やかりおどうきかひまそへ月を薫まそへてあり
里の名を　細字済かり
昔の人まわかりぬとるり　三　浮舟とゑり月を面がりりとハぞり　師里の名もむかしにかへるを見ハひんかひむ月を出かつりしてえかりとそかうか